静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
飯田　素乃香　IIDA Sonoka

<令和元年度修士論文（静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科）>

地方において本屋が「居場所」となる可能性
―八戸ブックセンターを事例として―

The possibility of becoming “Ibasho” in local area
――From a study of Hachinohe Book center

飯田　素乃香　IIDA Sonoka
（論文指導：静岡文化芸術大学教授　加藤裕治）

目　次

要旨……2
はじめに……4
第 2 章　八戸市の概況……8
第 3 章　八戸ブックセンターの概要……11
第 4 章　八戸ブックセンターの「居場所」としての現在……19
第 5 章　結論……40
図表……44
引用・参考文献……47

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
飯田　素乃香　IIDA Sonoka

論文要旨

本論文は、八戸ブックセンターの関係者や、施設を活用する人々への聞き取り調査によって、ブックセンターに集う人々の意識の実態を分析し、地方において本屋が「居場所」となる可能性について明らかにした。

八戸ブックセンター（以下：ブックセンター）は、2016 年に八戸市が開設した市営書店で、「本のまち八戸」の中心拠点として作られた。基本方針である「本を読む人を増やす」、「本を書く人を増やす」、「本でまちを盛り上げる」に基づき運営されている。実際に、ブックセンターに集う人々は施設を活用するなかで、それぞれに異なった意識を抱いていた。

こうした人々の意識は、「居場所」の概念である「受容空間」、「交流空間」、「創造空間」として三つの類型で捉えることが出来た。各々の「居場所」空間は、人々にとって様々な役割を担っていることが明らかとなった。

本屋のあり方について、本の購買という単一的な機能だけでなく、様々な機能が担うことのできる可能性があることが分かった。

キーワード：八戸ブックセンター、本屋、居場所

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
飯田　素乃香　IIDA Sonoka

Abstract

This paper has interviews with people who are involved in Hachinohe book center and those who use the book center frequently. It analyzes the consciousness of people gathering at Hachinohe book center and explains the possibility of bookstores becoming "Ibasho" in rural areas.

Hachinohe Book Center is a book store runs by Hachinohe city (LLP). It opened in 2016 and is considered as an important part of the policy called "Honnomachi Hachinohe" at present. It is managed based on three basic policies, which is "increase the number of people who read books", "increase the number of people who write books", and "make the city a better place with books". Actually, when we asked the people who visit the book center frequently about how they feel about the book center, the answers are so different.

Their opinions can be seen as "Ibasho", which has three types as "acceptance space", "communication space", and "creative space". What's more, the three types of "Ibasho" can play different roles for each people.

Key words: Hachinohe book center, bookseller (Honya), Ibasho

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
飯田　素乃香　IIDA Sonoka

１．はじめに.

1－1. 研究目的と問題意識

日本の本屋[1]は 1991 年に 27804 店舗存在していたが、2016 年にはその約半数の 14098 店舗にまで落ち込んでいる。本屋の減少を加速化した要因として、ネット型書店が挙げられる。ネット型書店は、店舗を持つ本屋と比べ、場所や時間を要さずに手早く本を購入することのできる点において、人々の購買行為に大きな影響を与えている。

では、こうした時代において、本屋がいかにあるべきなのだろうか。

本研究では、2016 年に八戸市が開設した本屋である八戸ブックセンター[2]を取り上げる。八戸ブックセンターは、八戸市が本のまちとなることを目指すために「本と出会う新たな機会の創出」、「本を通した市民交流及びまちづくり」の拠点施設として位置づけられ、「本を読む人を増やす」、「本を書く人を増やす」、「本でまちを盛り上げる」という基本方針のもと運営がされている[3]。実際に運営が開始されてから様々な人々が多様な目的で同施設を活用している。本論は、まずそうした人々の活用について整理し、その活用がどういった役割や機能を担っているのか、それを明確にすることを目的とする。

その際に、重要となる概念は、「居場所」という概念である。同施設は実施計画に基づいて開設され運営が行われているが、実際に人々は同施設をどのように活用しているのか。本論では社会科学的に考察を行う。こうした活用実態を観察、分析し、このあり方を「居場所」として定義したい。同施設は当初、「本を読む人を増やす」、「本を書く人を増やす」、「本でまちを盛り上げる」といった、三つの基本方針を掲げてスタートしたが、実際には、同施設では、他地域の人が集ったりネットワークを形成したりするなど多様な実践を開かれ、また、人々に様々な意識が醸成されている。

八戸ブックセンターにおけるこうした機能を調査し、地域において本屋が本を売る、買う以上の役割を担う可能性を持つことを把握する。それにより、今後の本屋のあり方＝可能性を考えていく。

---

[1] 近年、書店・本屋をプロデュースしている人のあいだで「本屋」というものをどのように考えるかについて議論が起こっている。語源的な見解では、「書店」の「店」という字は棚とも読み、商品を販売する建物や陳列する場所を指している。一方、「本屋」の「屋」という字は、「本をそろえて売買する人」や「本を専門としている人」を表している。(小学館、『精選版　日本国語大辞典』(2017) を参照)。この語源を参照し、内沼（2013、2018）は、単に本を陳列する本棚と平台といった「場所」が存在するのではなく、「人」が運営を行うことで店内の様子が絶えず変化し続ける状態が重要であると捉えており、自身の著書において「本屋」という言葉を用いている。また、奈良（2011）、田口（2018）も同様の理由から、「書店」ではなく、「本屋」を採用している。本研究において活用する「居場所」概念には、人との関係性なくしては論ずることが出来ないため、筆者も彼らの意見に賛同し、「本屋」という呼称を援用する。

[2] 平成 25 年 3 月の市長選挙時に小林眞市長が市長三期目の政策公約に基づいて構想した。市が本屋を運営する事例としては、全国で初の試みとなっている。八戸市 HP を参照。

[3] 八戸市『八戸ブックセンター基本計画書』(2015) を参照。

1－2．先行研究

本論は「居場所」の観点から八戸ブックセンターにおける場としての機能を明らかにすることを目的としている。最初に「居場所」の概念について変遷をみていく。

「居場所」という言葉は、1980 年代半ばに登場し、当初は、不登校の子どもが昼間に通うフリースクールなどを指していた[4]。そのため、「居場所」論に関する先行研究は、子どもや若者を対象にした教育や福祉の観点から語られてきたものが大部分を占めている。例えば、『子ども・若者の参画シリーズ』（2004）では、実際にまちづくりや文化学習センターの活動に携わっている NPO 法人や教育関係者が、それぞれの立場から大人・子ども・若者へのインタビューを通し、子どもや若者のための「居場所」づくりのプロセスにおける参画の意義、限界、矛盾を明らかにした。各々に現場では残る課題はみられつつも、社会的な事柄に子どもが意見表明することだけでなく、個に即した事柄に対する子どもたちの自己実現も「参画」として捉え、実践者側が支援していく必要性が指摘されている。

一方、近年では「居場所」が教育機関に限らず、地域社会や家庭、職場などあらゆる空間を対象に、論じられる傾向がみられている。例えば、阿部は、高齢フリーター、大学生、ヤンキーと呼ばれる若者など多様な背景を持つ人を取り上げ、職場・地域における「居場所」のあり方について論じている。彼は著書において、「居場所」には、他者とのコミュニケーションの活性化によって自主性を築く方向性と、対人関係から逃れ安心して過ごす方向性があると指摘した。

このように、「居場所」概念は、次第に教育施設における子どもや若者を対象とするものから、地域社会における幅広い世代を対象とするものに拡張されていった。さらに、近年では、図書館などの公共施設に「居場所」という概念が使われる事例も出ている。こうした点から、本論においても、公共施設である八戸ブックセンターにおいて、「居場所」概念を援用することが可能であると考えられる。

その際、本論では、阿比留久美（2012）の「居場所」概念が有効だと考える。というのも阿比留は「居場所」概念に関してはいくつもの軸が設定されており、それらの要素を網羅的に整理する統一見解が見出しにくいと指摘している。そのため彼女は、これまでの議論を整理した次の三つの類型を用いて「居場所」概念を説明している。その三つとは、「受容的空間としての『居場所』」、「関係性の中での『居場所』」、「社会・創造空間としての『居場所』」である。これらは、先で見た様々な「居場所」の概念を再整理するものであり、公共施設の役割と機能、つまり本論で論じる八戸ブックセンターの利用状況の実態を分析する際にも有効な概念だと考えられる。なお、阿比留は、三つの類型を次のように整理している。

---

[4] 田中治彦・荻原建次郎、『若者の居場所と参加　-ユースワークが築く新たな社会-』阿比留久美「第 2 章「居場所」の批判的検討」（2012）pp.35-39。

まず、「受容的空間としての『居場所』」は、自分を演じたり、つくろうことなく安心して存在できる空間を示す。この定義は「居場所」における一般的なイメージとされてきたが、住田正樹によれば、近年において「他者の受容や承認」という意味合いが付与されると指摘している。(阿比留 2011:p37)。「受容的空間」は、「当事者の主観」に依拠する要素が大きいとされる。

次に、「社会的・創造的空間としての『居場所』」は、「受容的空間」とは対照的に社会への能動性が高い空間である。「居場所論」と子ども・若者の参画論が結びつけられるなかで、広く展開されており、受容的機能を果たしつつ、子ども・若者の自治を育み、活動に参加し、社会とのつながりを能動的に築いていく試行錯誤の可能な空間として捉えられている（阿比留 2011:p.38)。

最後に「関係性の中での『居場所』」は、他者からの「まなざし」や「語り」を媒介した応答関係によって身体性を持った存在として自分を確認することのでき、相互主体的な関係性を創造する空間である。阿比留は、ここでは、受容されるとともに、安心して自分の気持ちを発信し、能動的に行動することができるようになっていくプロセスが暗示されると指摘している。

こうした「居場所」論の理論的な枠組みをもとに、本論においては、八戸ブックセンターがどのような「居場所」となっているのか。実際に、利用する市民、読書団体連合会、本屋、図書館、文化施設、市外の地域住民など様々な人々を対象に検討する。なお本論中で「居場所」概念の 3 類型を使用する際には、先に述べた阿比留が提示した類型を基盤とし、「受容的空間としての『居場所』」を「受容空間」、「社会的・創造的空間としての『居場所』」を「創造空間」、「関係性の中での『居場所』」を「交流空間」として定義づけた。

こうした概念に基づき、本論では、八戸ブックセンターの主に政策面的な側面からだけでなく、実際に現在、利用している人々の実際の活用方法、利用者意識、そしてそれが地域にどういった影響を与えているのかを分析していく。そうすることで、八戸ブックセンターにおける「居場所」の実態及び、他の地方における本屋への応用可能性に関して論じていくものとしたい。

1－3. 分析の方法

本稿では、まず、文献調査によって八戸市の特徴や八戸ブックセンターについて整理する。次に、八戸ブックセンターの職員、八戸市に在住する市民、市民団体、文化施設、民間書店、図書館を対象に、八戸ブックセンターにおける各々の対象による活用や役割の実態を明らかする。これらに関しては、2018 年 9 月 26 日（水）～30 日（日）と 2019 年 9 月 13 日（金）～25 日（水）にそれぞれ実施した聞き取り調査と、2019 年 8 月 21 日（水)、10 月 8 日（火）送付されたデータをもとに進める。対象者に関しては、表 1 を参照されたい。

1－4．本稿の構成

本稿では、初めに「居場所」概念の検討を行ってきた。

第 2 章においては、八戸市の地理や文化など地域性を整理する。

第 3 章においては、八戸ブックセンターが開設された経緯や、開設当初に計画していた施設の機能について把握する。

第 4 章については、八戸ブックセンターにおける人々の活用の実態を整理するとともに、そうした利用者の意識のあり方について調査し、記述した。

そして、第 5 章では、第 4 章から明らかとなったブックセンターに対する人々の実践や意識の変化から、八戸ブックセンターが彼らにとってどのような「居場所」になっているのかを分析し、地域における本屋にそれがどのように応用できるかについて述べる。

第 2 章　八戸市の概略

本章では八戸市及び地域に根付いている本屋について概況を述べる。

2－1．八戸市の特徴[5]

青森県八戸市は県南東部に位置し、人口 23 万人を擁する中核市である。青森県に属してはいるが、地理的にみれば岩手県に近く、独自の文化をもつ地域ともいわれてきた。

八戸市は昔からやませが吹き、津軽地方のように米が獲れなかったため、漁業や工業で発展をした。なかでも、イカの水揚げ量は全国 1 位として知られている。

また、地元の市民は八戸の文化レベルを懸念しているが、八戸市には、全国で最古となる八戸市立図書館が存在する。八戸市立図書館（以下「市立図書館」という）の前身である「書籍縦覧所」は、「大仲間」と呼ばれる旧八戸藩士の読書グループが尽力[6]しており、幕末には既に市民のあいだで読書会が行われていたという[7]。さらに、八戸市では、1984 年に一般社団法人八戸市読書団体連合会（以下「読書団体連合会」という。）が全国で初めて社団法人化し、市立図書館に読書団体の会合を行うことの出来る喫茶室「らいぶらりい」[8]を開設した。読書団体連合会によるこうした運営は、全国でも珍しい取り組みとして注目された[9]。

そのほか、八戸市は青森県の三つの国宝があることと、全国規模の二つの祭り（えんぶり・三社大祭）が開催されていることなどが特徴として挙げられる。しかし、新幹線が八戸駅に開業したことを機に、人口減少が加速化し今ではピーク時より 2 万人減った[10]。近年では特に、若年層の流出も著しくみられ、次世代の地域文化の担い手不足やまちづくりへの影響が懸念されている。

2－2．八戸市における民間書店の現状[11]

八戸市における民間書店は、文教堂八戸駅店、川村商店、書店はちのへ、伊吉書院西店、TSUTAYA 八戸ニュータウン店、カネイリ番町店、アリス書店、くまざわ書店八戸店、未来屋書店八戸店、伊吉書院類家店、木村書店、成田本店みなと高台店、みなみ書店の計 13 店舗[12]である。そのうちの 9 店舗は、青森県に本店を置き、地元に密着した本屋が多い傾向がみられる。特に、伊吉書院、

---

[5] ここで述べる八戸市の概念については、八戸市の HP および社団法人八戸観光コンペンション協会『南部寺子屋「はちのへ塾」八戸ふるさと検定』(2011) を参照した。
[6] 八戸市立図書館の開設経緯に関しては、 間山洋八『青森県読書運動明治大正史』(1980) および八戸市立図書館百年史編集委員会『八戸市図書館百年史』(1972) を参照。
[7] 朝日新聞、1974 年（昭和 49 年）3 月 14 日、「八戸の“先輩”は勉強好き」を参照。
[8] 喫茶室「らいぶらりい」は図書館の移転新築に伴い、読書普及活動をより推進するために開業した。読書団体連合会の事業である「夕ぐれ朗読会」の会場としても活用され、ケーキや珈琲を飲みながらの活動出来たことが好評であったという。2011 年以降、売り上げが減少し始め、2017 年 3 月に閉店している。『一般社団法人　八戸市読書団体連合会創立 50 周年記念誌　文庫』(2018)
[9] 東奥日報、1984 年（昭和 59 年）6 月 7 日、「読書団体が喫茶室「らいぶらりい」開業」を参照。
[10] 藤井理人「地域活性ビジネス事例研究 65」『JAGATinfo』(2018) を参照。
[11] ここでは注釈がない限りは、グラフ青森『青森の暮らし 420 号』(2019) を参考に述べていく。
[12] 八戸ブックセンター「八戸と本をつなげるフリーペーパー　ほんのわ 2018」(2018) を参照。

成田本店、カネイリ番町店、木村書店は創業 50 年以上の老舗書店である。これらの店舗については、特徴を下記に記載する。伊吉書院は、地域の本屋として最も歴史が古く、八戸市における読書運動に関わっているため、その点についても本節で取り上げた。

（1）合資会社伊吉書院[13]

1885 年（明治 18 年）に、伊吉書院の前身である「書肆伊吉商店」は伊藤吉太郎氏によって創業した。伊吉書院は、当時、八戸便覧によれば、書籍だけではなく「楽器理化器、博物館標本運動具、教育的雑記帳及び筆墨紙、椅子（いす）学校用具一式、活版印刷」も手掛けており、ほかにも「毛皮に洋品、洋酒、新聞の取次所」など、のちに「地域のさきがけ」となった品も販売していたという。

だが、伊藤吉太郎氏の働きで現在でも名が残っているのは、書店業の傍ら、「明治、大正の時代に私財を投じ創業した「伊吉巡回文庫」である。八戸市立図書館所蔵の是川尋常小学校の文書に三戸郡役所が 10 年、都内の町村に通達した「伊吉巡回文庫規定」が残されている。「八戸町書肆伊藤富太郎の寄付により郡内小学校に参考書を提供し教育上の利益を図ることを目的とする」で始まる規定は八条から成る。寄贈者は長男富三郎の名だが、表題が伊吉とあるように、商売のさい配はひとり吉太郎が振るっており、文庫の発案、実行も吉太郎とされる。」（東奥日報夕刊 1999 年　6 月 5 日）「伊吉巡回文庫」は学校を閲覧場所とし、十五日間留め置き、次の学校に引き渡しており、「少なくとも当時の都内 32 町村をリレーしながらくまなく回った」という。「是川尋常小」の「11 年の報告書には利用状況の一端が記載されており」、「30 日間で 40 人が閲覧、7 人が貸し出しを受け」、「閲覧した図書は歴史 3、小説 1、修身 4、国語 2、おとぎ話、実業 2、農業 1 、理学 1 冊とある。」このなかで、おとぎ話が最も読まれていることから、「利用者の大半は児童生徒」だったことがわかる。これによって児童生徒は読書の楽しさを知ることとなった。伊吉の巡回文庫は「“官製” の青年団体を母体に組織された簡易図書館が各地に誕生する 1920 年（大正 9 年）を最後に記録から途絶えているが」、この時代において彼が取り組んだ「ブックモビール」という形の文化支援が、各地の図書館の開設を促したという。

（2）成田本店

1908 年に、成田善三郎氏が成田本店の前身である「成田商店」を青森市に創業した。創業の契機は、青函連絡船が就航したのでこれから青森市が栄えていくだろうと考えたためである。「りんごの樹をモチーフにしたシンボルマークは、「可能性」、「人間的感情」、「実り」、「創造性」、「未来」などのイメージを凝縮し、あわせて地域に密着しながら健やかに発展することを願う気持ちを表したもの」である。成田本店は、創業当初から本の他に文具を扱っていることが特徴である。

[13] 東奥日報、1999 年（平成 11 年）6 月 5 日、「読書の楽しさ庶民に」を参照。

（3）カネイリ番町店

1947 年、カネイリは八戸市番町で文具店として創業した。1980 年に、現在の「金入ビル」を建て、一階を文具店、二階に書籍部門を開設し、本屋として運営を始めた。客層は高齢者が多く、関連する本は、雑誌と本でジャンル分けをせず同じ棚に陳列しているなど、客が目的の本を探せるような棚づくりを行っていることが特徴である。また、文庫も出版社ごとではなく作家ごとに陳列している。

（4）木村書店

1927 年、木村忠蔵によって小中野町に木村書店の前身である「木村商店」が開設された。現在、創業 90 年の木村書店では、ポップ担当の書店員によって、手描きのポップと一緒に本を販売している。店内には「ポップ百選」のコーナーがあり、絵本から小説までジャンルを問わない本が陳列されている。そのどれもが、書店員自身で読んで面白いと感じた本である[14]。これは、子どもに本を読む楽しさを伝えたいという考えで始めた取り組みである。

[14] 栗村が「地方書店の未来」に関して木村書店を取材した際の記事を参照。Magazine「colocal コロカル」　https://colocal.jp/news/118968.html（2020 年 2 月 18 日 最終閲覧）。

第 3 章　八戸ブックセンターの概要

3-1. 八戸ブックセンターの開設背景

2016 年 12 月 4 日、八戸ブックセンター（以下「ブックセンター」という）は青森県八戸市によって中心市街地に建つ複合ビル「ガーデンテラス」の一階に、全国で最初の市営書店として開設された。店舗面積が 315 ㎡で約 95 坪という小規模な店内には、約 8000 冊の本が陳列されている[15]。ブックセンターは、2013 年 3 月の市長選挙時に小林眞市長が掲げた市長三期目の政策公約に基づいて構想された[16]。政策公約の内容は下記の通りである。

市長政策公約（一部抜粋）

「本のまち八戸」を目指し、赤ちゃんを対象にした「ブックスタート」と新小学生を対象にした「ブッククーポン」の配布を行うとともに、書店との連携により、本のセレクトショップ「八戸ブックセンター」を開設します。

（「八戸ブックセンター基本計画書（2016）p. 1」抜粋）

2013 年 3 月に八戸市が策定した「第二期八戸市中心市街地活性化基本計画」において、「本のまち八戸交流拠点形成事業」が掲載された。「本のまち」とは、市民が豊かな心を育くみ、本のある暮らしが当たり前となる文化の薫り高いまちを目指す施策である。ブックセンターは、「本のまち八戸交流拠点形成事業」において、中心市街地に整備する「本のまち八戸」を推進する拠点として位置づけられた。同時に、“本に関する新たな公共サービス”として、民間書店に置かれる機会の少ない海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術を始めとする分野の本との出会いを創出し、本に関するイベントや書店と連携した企画を実施することが掲げられた。

また、ブックセンターの整備によって、来街者の増加と回遊性の向上を促進させ、他の公共施設と連携をすることで中心市街地の活性化へ寄与することが期待された。

2014 年 9 月には、八戸市が策定した「第 6 次八戸市総合計画」（以下：総合計画）に、「本のまち八戸」の位置づけに関して明記されている。総合計画において、重点的に推進すべき五つのまちづくり戦略の一つとして地域社会で活躍する人材を育成する「人づくり戦略」があり、そのうちの教育プロジェクトの一環として「本のまち八戸」は位置づけられた[17]。

第 6 次八戸市総合計画（計画期間　平成 28～32 年度の 5 カ年計画）

―第 5 章　戦略プロジェクト

---

[15] 八戸ブックセンター「八戸市を「本のまち」に ： 八戸ブックセンターの整備」（2017）を参照。
[16] 八戸市 HP を参照。
[17] 音喜多信嗣「政策デザイン″思考″サクゴ 八戸市を「本のまち」に -八戸ブックセンターの 1 年から-」『地方自治職員研修 / 公職研［編］51(5)』（2018）を参照。

―戦略 1　人づくり戦略

―施策 2　本のまち八戸推進

（「八戸ブックセンター基本計画書（2016）pp. 1」抜粋）

2014 年度以降、「本のまち八戸」を推進する取組として、乳幼児とその保護者、小学生をそれぞれ対象に展開された。その後、中高生から大人を対象としたブックセンターが、「本のまち八戸」を推進する中心拠点として開設された。八戸市は、施設の運営費である 6000 万円のうち、4000 万円を補てんするものとした。

行政が公共サービスの一環として書店を運営する事例はこれまで 5 件みられたが、いずれも出版文化振興財団が無書店自治体を支援して始まっている。なお、現在、北海道礼文町の「BOOK 愛ランドれぶん」と休業中の飯館村の「ほんの森いいたて」[18]を除く書店は、被災や経営難、市町村合併が原因で閉店したという。

こうした事例とは異なり、八戸市には 14 店舗もの民間書店が存在する。そのため、八戸市がブックセンターを開設する計画を公表した際、市議会やメディアによる批判の声が挙がった。そのなかで目立ったのは、図書館におけるサービスの充実への要求と、民業圧迫に対する懸念である。ブックセンターは、当初から「図書館で本を借りて読む体験」と「書店で本を買って読む体験」は別物であり、書店が、図書館とは異なり、本を「私有」する体験を充実させる場であることを強く意識した。そのため、本との「偶然」の出会いを大切にするうえで棚づくりにおいて、図書コードに沿う方法ではなく、編集型・企画型を実施する計画を立てた。また、ブックセンターは民間書店と競合しない位置が与えられた。ブックセンターは民間書店のインフラであるベストセラーや雑誌は販売せず、経営面の事情により本屋置かれる機会の少ない専門分野の本を陳列している。さらに、当初からブックセンターの窓口では本の取り寄せは行わない方向性である。それは、ブックセンターだけではなく、民間書店を筆頭とする他の施設に人が足を運ぶことで「本好き」によって、八戸市が「本のまち」になると考えることを実現しようと考えたためである。

このコンセプトに基づき、八戸市はブックセンターの運営の三つの基本方針に、“本を「読む人」を増やす”、“本を「書く人」を増やす”、“本で「まち」を盛り上げる”を設定した。これらの基本方針に則り、「施設運営・管理」、「選書・陳列」、「イベント・展示等企画」、「宣伝・広報」

---

[18] 1995 年、村民の交流施設「ビレッジハウス美囲社」が建設されることになった際、「村民企画会議」で「本に親しめる場所が欲しい」という村民の意見が多く寄せられた。飯館村は、出版文化産業振興財団（JPIC）の主宰する地域読書環境整備事業に申請し、全国初の村営書店である「ほんの森いいたて」を開設した。子どもたちが読む児童書や絵本、郷土史が充実しており、座って本が読めるスペースが確保される図書館のような雰囲気を持たせることをコンセプトとした。2011 年 6 月に東日本大震災の影響による放射線物質が原因で休業する。稲泉連『復興の書店』(2014) を参照。

などの業務に携わるディレクターとして、東京 B&B の経営者でブックコーディネーターである内沼晋太郎氏を招き、開設準備を進めた。

まず、2014 年 10 月から 2015 年 3 月までの期間には、品揃えに関する調査と意見交換の実施を市内書店や図書館、公民館にある図書分室、八戸市読書連合会を対象に実施し、これらを踏まえたうえで、「八戸ブックセンター」及び「本のまち八戸」プロジェクトに関するコンセプト、事業内容案等の構想を作成した。

次に、2015 年 4 月から平成 28 年 3 月までの期間には、施設設計（工事基本設計書）や施設運営に係る業務内容、選書コンセプト、選書案、ウェブサイト展開案、従事職員の候補者選定、基本計画書素案、「八戸ブックセンター」及び「本のまち八戸」ロゴマーク案の検討や作成を実施した。また、従事職員の選定については、施設の嘱託書店員は全国から公募で募り、販売員は有限会社（LLP）を構成する三つの民間書店に支援され選定されている。次に、基本計画書素案の作成を実施した。他にもトークイベントを始めとするプレ事業やオープニング事業の検討を行っている。

3-2.「本のまち八戸」の取組

本節では、平成 25 年の市長選挙時に政策公約として掲げられた「本のまち八戸」の三つの取組のうち、八戸ブックセンター（以下「ブックセンター」という。）の開設よりも以前に先行して行われてきた二つの事業と、新しく開始した事業について基本計画書をもとに整理する。

（1）ブックスタート事業

2014 年 7 月から開始した図書館が担当部署となり生後 90 日から一歳未満の子どもと親を対象にした事業で、赤ちゃんと保護者が絵本を介して心ふれあう時間を持つ機会を提供している。八戸総合健診センターで股関節脱臼検診の終了後、ボランティア団体ブックスタートによる絵本の読み聞かせが実施され、ブックスタートが作成するリストから選ばれた絵本一冊と、教育委員会や NPO 団体が作成した絵本の紹介冊子、図書館の利用案内が配布される。八戸市立図書館の副館長によれば、１回につき参加する親子づれは 30 組から 60 組で、図書館の職員 3 名とボランティア 3 団体のなかから 4、5 名が対応する。

（2）マイブック推進事業

2014 年度から始まった教育指導課が担当部署となり、市内の小学校に通う児童を対象とした事業である。毎年、八戸ブックセンターが「おすすめブックリスト」を作成し、市内書店で 6 月から 8 月までの間に本の購入が可能な金券「マイブッククーポン」約 2000 円分[19]を配布する。平成 27 年度にはマイブック事業でクーポンの利用率が 95.8%に達した。

[19] 2018 年 9 月 27 日、読書会ルームにて音喜多信嗣へインタビュー調査を行った内容に基づく

また、八戸ブックセンターのスタッフによって、市内小学校へ訪問して行う「出張ブックトーク」が実施されている。

(3)“読み聞かせ”キッズブック事業[20]

2016 年度から、マイブック事業でクーポンの利用率が 95.8%に達したことから子育て支援課が市内の 3 歳児のいる家庭にも、市内書店で本の購入が可能な金券「キッズブッククーポン」を郵送している。幼児教育の初めとなる三歳児に対し、保護者が絵本等の読み聞かせの機会を創出することを目指している。

3-3. 八戸ブックセンターの施設概要

八戸ブックセンター（以下「ブックセンター」という。）は、八戸市大字六日町に建設した複合ビル「GardenTerrace」の一階に開設された。「GardenTerrace」は株式会社江陽閣が旧レックビル・マルマツビル跡地に建設した“商業機能を有する地上四階建てのビル“であり、一階は公共的通路を挟んだ左右に飲食店と物販店が、2 階と 3 階はオフィスが、4 階は飲食店と屋上テラスが設置されている。また、「GardenTerrace」の三日町側に位置する約 1,100 ㎡の敷地には、2 階建ての仮称「三日町にぎわい拠点」が整備されることが計画され、2018 年 7 月 21 日に「八戸まちなか広場”マチニワ“」として開設された。「八戸まちなか広場”マチニワ“」は、”水・緑・光などの自然を感じられる透明感のあふれる空間“であり、日常的に人が集まり、市民の新しい活動・交流の場の役割を持っている。

ブックセンターには、基本方針“本を「読む人」を増やす”、“本を「書く人」を増やす”、“本で「まち」を盛り上げる”に則り、“本に関する新たな公共サービス“に沿った公共サービスを提供する人的機能と物的機能が備えられている。人的機能である施設の職員は、ブックセンター主任企画運営委員こと嘱託書店員が 3 名、行政職の事務職の職員が 3 名[21]、地元書店三店舗が結成した有限責任事業組合員（LLP）であり本の注文レジを担当する販売員が 4 名、計 10 名である。有限責任事業組合員（LLP）とは、行政の仕組み上、八戸市が顧客に直接本を販売することが難しい点と、地元書店からの協力したいという気持ちから、伊吉書院、木村書店、カネイリ番町店の三つの書店がつくった組合である。なお、書店ではなく、販売員が個人で組合員となっているかについては不明である[22]。また、ブックセンターには物的機能として「セレクト・ブックストア」、「読書席」、「読書会ルーム」、「カンヅメブース」、「ギャラリー」、「カウンター」が設けられている。それぞれの内容について、下記に整理する。

[20] 2018 年度まで行われていた。
[21] 2019 年 9 月 14 日、音喜多信嗣へのインタビュー調査に基づく。
[22] 2018 年 9 月 27 日、音喜多信嗣へのインタビュー調査に基づく。

3-3-1. 施設の設備について[23]

（1）セレクト・ブックストア

主に海外文学や人文・社会科学、自然科学、芸術などの専門分野を中心に、初心者が手に取りやすい入門書を幅広くそろえている。また、棚づくりは日本独自の図書分類である C コードの分類法ではなく、「八戸ブックセンター基本計画書」に沿った独自のテーマを設け、関連する本を陳列するものとしている。棚のテーマには、「入門基本書棚」、「普遍的テーマ棚」、「地域資源等に関するテーマ棚」、「フェアテーマ棚」、「ひと棚」、「わたしの本棚」、「本のまち棚」、「新刊平台」が挙げられる。これらについて整理するものとしたい。

まず、「入門基本書棚」は八戸ブックセンターの選書の中心となる専門分野である「芸術」「自然」といった名称を大分類とする棚である。次に、「普遍的テーマ棚」は日頃、本に親しみのない人も本を手にする機会を創出することを目的に、「愛するということ」、「仕事のはなし」など不特定多数の人が興味関心をもつ名称を大分類に設定した棚である。三つ目は、「八戸の地域資源等に関するテーマ棚」で八戸市の産業、文化、風土、自然環境などの地域資源に関係する事柄をテーマに選書した陳列となる。例えば、大分類に「工場」、「ジャズのまち」、「横丁」、「イカと海」が挙げられる。四つ目は、主たる取扱い分野の書籍について、大小様々に設定した時限的テーマのもとに幅広く選書し、編集した陳列を行う棚である。例えば、「ねむりの秘密」、「人工知能」、「家電のふしぎ」、「マイブッククーポン事業との連携による棚」が挙げられる。五つ目は、市内の研究者や書店員、八戸市ゆかりの人物や来訪歴のある人物に、あるテーマを設定したうえで選書を依頼する棚である。現在は前述の人物に加え、市内の文化施設や市民団体も対象としている。この棚は一定の期間展開した後、次の先生へリレーをする方式をとる[24]。六つ目は、一般の市民に向けて 8 冊から 10 冊をあるテーマをもとに公募する「わたしの本棚」である。七つ目は「読む人を増やす」「本を書く人を増やす」「本でまちを盛り上げる」の三つのコンセプトに沿った分類や、本に関する書籍やリトルプレスについての分類がされた「本のまち棚」である。棚の大分類は、「「読む人を増やす」、「書く人を増やす」、「まちを盛り上げる」、「本にまつわる諸々」、「小さく作られた本」が挙げられる。八つ目は、新刊平台である。

（2）読書席[25]

塔のような高い本棚に囲まれた空間やハンモックが吊るされた空間、八戸ゆかりの作家の文机、様々な本棚のあいだに挟まれた空間など、居心地の良い空間が演出されている。また、カウンターで購入したドリンク用のホルダーを読書席の傍に設置することで、ドリンクを楽しみな

[23] ここでは注釈がない限りは『八戸ブックセンター基本計画書』(2015) を参考に述べていく。
[24] 2018 年 9 月 27 日、読書会ルームにて行った森佳正へのインタビュー調査に基づく。
[25] 音喜多信嗣によれば、利用者の声に応じてバージョンアップを行っているという。例えば、最初は網状のハンモックだったが、ポケットの中身が落ちるのを防止するため現在では布状のものに変更されている。また、これまで二つに並べていた読書会ルームのテーブルをさらに分けて配置し、そばに雑誌専用の棚を設けるなど、以前より利用者が入りやすいような工夫が施されている。

がら本に触れる時間をゆっくりと過ごせる空間となっている。

（3）読書会ルーム

日常的な業務となる「本のまち読書会」や「ブック・ドリンクス」、「アカデミックトーク」、「執筆出版ワークショップ」や市内書店との会議、市内読書団体の読書会、本のまち八戸ブックフェスの会場などに活用される。また、読書会やイベントが実施されていない時間は読書席として市民が使用している。

（4）カンヅメブース[26]

外部に公開する目的をもった本や創作物などを執筆したい人向けに、貸出される小部屋である。カンヅメブースを利用するには、書店員に活動内容を報告し、市民作家[27]の登録を済ませたうえで事前に予約する必要がある。

（5）ギャラリー

特定の作家や作品に関する展示や本の印刷、造本、装丁などに関する展示を行う。企画展示は、ブックセンター主催、関係機関の共催によるものなど様々である。

（6）カウンター

ブックセンターや本のまち八戸に関する案内窓口と、レジカウンターが設けられている。

3-3-2. 施設における企画について[28]

先に述べてきたブックセンターの物的機能を介し、“本を「読む人」を増やす”、“本を「書く人」を増やす”、“本で「まち」を盛り上げる”の三つの基本方針に則した施策が実施されている。本項においては、それぞれ実施されている企画事業を整理する。

①本のまち読書会[29]

---

[26] 『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 30 年度版）』(2018) によれば、カンヅメブース利用件数は、2016 年度から 2018 年度までで累計 153 件に上っている。近年では、市民作家登録をするだけでなく、実際に本を出したいという市民が、ブックセンターの職員に市内の印刷所などを紹介してもらう出版相談窓口を利用するケースも出てきているという。また、ブックセンターの書棚では、市民が執筆した本を閲覧することが可能である。2018 年 10 月から開始したギャラリー企画「紙から本ができるまで展」の一環で詩人の菅啓次郎氏が八戸の詩人「村次郎」の詩集を出版する際にカンヅメブースを利用した。

[27] 『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 30 年度版）』(2018) によれば、市民作家登録者数は、2016 年度から 2018 年度までで累計 194 件に上る。

[28] ここでは特に注釈がない限りは、『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 29 年度版）』(2018)、『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 30 年度版）』(2019) を参照する。

[29] 月 3～4 回の頻度で開催される。2017 年度は計 27 回、2018 年度は、計 23 回開催し、延べ 228 名が参加をしている。「本のまち読書会」の企画には、初心者が参加しやすい表紙の素敵な本を探す「ジャケ読！」や書評の載った新聞やさまざまな出版社が刊行している PR 雑誌をめくりながら次に読みたい本を

八戸ブックセンターが主催する読書会であり、テーマの本を設定したり、ゲストを招待したりする。「本のまち読書会」では、テーマ本への理解や参加者の間での本を通した交流を深めたり、これまで関わらなかった本やジャンルへの興味を喚起したりする機会を創出する。また、時には普段あまり本を読まない人でも参加しやすいテーマで読書会を行うこともある。

②ブック・ドリンクス

お薦めの本を持ち寄り、八戸ブックセンターで販売しているドリンクを飲みながら本について自由に語り合う交流会である。「ブック・ドリンクス」が特徴的なのは、テーマを設定せず予約の申し込みが不要である点だ。本好きが集う場所であると同時に、八戸ブックセンターの企画に初めて足を運ぶ人でも参加しやすい企画事業となっている。

③執筆・出版ワークショップ[30]

“小説や自分史の書き方、電子書籍の作り方など執筆や出版に関するワークショップ”で、カンヅメブースの利用者であり市民作家の ID カードを持った人向けである。
“本を「書く人」を増やす”取り組みの一つとして、座学のみならず、実際に体験する演習型のワークショップの方法を用いている。また、同じ「書く」志をもつ人同士が顔を合わせることで互いに創作意欲を刺激し合う空間となっている。

④アカデミックトーク

八戸市内の大学や専門学校の先生を招き、本を軸とした知的好奇心を刺激するアカデミックなトークショーを開催する。現在は、当初「八戸ブックセンター基本計画書」でゲストの対象に含まれていなかった、八戸市に比較的アクセスの近い美術館や文化施設の学芸員も招き、企画展やその美術館の主な特色となっている常設展の魅力を語る会も開催している[31]。

⑤市内書店[32]との連携（市内書店個性化プロジェクト）

書店の個性や立地の特性、スタッフの関心領域などに合わせ、個性ある棚づくりをサポートするプロジェクト。月に一度、八戸ブックセンターの読書会ルームに市内書店の書店員が集い、それぞれの店舗の書棚を紹介したり、アドバイスをしたりする「情報交換会」を開いている。

探す会、さらに、テーマ本を設定し参加者で本の感想を語り合う「知の棚チチェローネ」などが挙げられる。

[30] 『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 30 年度版）(2019)』によれば、2018 年度までに計 5 回開催され、延べ 65 名が参加している。2018 年 7 月 8 日に鷹野凌氏を講師とし、実施された「電子出版ワークショップ」、八戸歴史研究会会長の三浦忠司氏が講師となった、2018 年 8 月 26 日（土）の「郷土の歴史のつむぎかた」、2019 年 2 月 23 日に田丸雅智氏が担当した「超ショートショート講座」など。

[31] 2018 年 9 月 27 日、読書会ルームにて行った森佳正へのインタビュー調査を参照。

[32] 本論では基本的に「本屋」という呼称を用いているが、八戸市内に所在する本屋については、店舗名に書店を名乗る店舗もあり混乱を避けるため、市内書店と記載する。

⑥ギャラリー展示

八戸ブックセンターが主催となったり、他の機関と共催したりし、企画展示を実施する。「本」に関する事柄を多角的な視点から発信することで、その面白さによって幅広い人々の興味関心を刺激する[33]。

3-3-2. まちなかにおける企画について

①本のまちブックフェス

毎年 9 月末のホコテンの日に様々な団体と連携し、一箱古本市やトークイベントなど、本に関する様々な企画を開催する。ブックセンターが開館するまでは、八戸ポータブルミュージアムはっちが主催となり、「はっちの一箱古本市」としてイベントを実施していた。2017 年度より、八戸ブックセンターが主催し実施し続けている。

②ブックサテライト増殖プロジェクト

「ブックサテライト増殖プロジェクト」とは、八戸ブックセンターが市内の小売店や飲食店、公共施設に呼びかけ、「ブックサテライト」として小さな本箱を設置し、市内全域に拡がるさまざまな本棚スポットをめぐる楽しさを創出する。また、八戸ブックセンターから年に一度、フリーペーパー「ほんのわ」を発行し、本にかかわる店舗並びに施設を、主に図書館や書店を始めとするブックスポットとスターバックスや八戸水産科学館といったブックサテライトに分け、地図で示しながら紹介している。

[33] 2018 年度は計 7 つ、2019 年度は計 6 つの展示がされている。例えば、2019 年 4 月 27 日～7 月 21 日の期間には、町口覚、佐藤亜沙美、大西隆介の 3 人のブックデザイナーがつくる本の仕様書を展示する「ブックデザイナーの仕様書展」が開催されている。

第４章　八戸ブックセンターにおける「居場所」としての現在

本章では、前章で述べてきた八戸ブックセンター（以下「ブックセンター」という）の概要を把握したうえで、実際に、地域の人々がどういった意識のもとで活用しているのかを整理する。八戸市の市民、市民団体、他の地域に在住する人々、読書団体連合会、文化施設、図書館、民間書店を対象とした聞き取り調査のデータを参考に、まずは、同施設の各々の物的機能、次に、ブックセンターが施設の外側である地域において展開している事業をみていくものとする。なお、ヒアリング対象については、論文末の付記に示した表２を参照されたい。

4－1　八戸ブックセンターに集う人々

4－1－1　読書会ルームの利用状況とそこを活用する人の意識

ブックセンターの読書会ルームは、「本から得た知識や情報、感情などを共有できる場である読書会用の部屋」として設けられた。実際に、読書会ルームは、個人の市民、市民団体のメンバー、他の地域に在住する人々、読書団体連合会会員、文化施設の学芸員、本屋によってどういった方法で活用がされているのか。本項はそれらの実態を明らかにするものである。

（1）個人の場合（一般市民）

①市民Ａ氏の場合（40 代　女性）

Ａ氏がブックセンターに通う契機となったのは、2017 年 8 月 19 日（土）に開催された「本のまち読書会」、「知の棚チチェローネ　第５回　２巡目の 1～「池上彰」本からはじめる資本論～」への参加だった。参加の動機について、Ａ氏は「ビジネスと絡めた感じのことをパンフレットでうたっていた」のを偶然見かけ、八戸に住むビジネスマンとの交流を望んでいたという。結果的に、目的としたビジネスマンには会えなかったが、次の引用のような体験をした。

家に帰ってそのときに村上春樹の本を読んでいたんですよ、それにマルクスっていう言葉が出てきたんです。もうちょっとかみ砕いて資本論説明している本ないかなとここにきて、それでちょっと入門的な本をすすめてもらった。それを読んで今までいくらか知らなかった世界が広がって、それまでは本の読み方とか深く考えたことなかったけど、本って読み方あるんだなって。きっかけはそれですね、はっきり。

Ａ氏にとって、上記で初めてこの読書会に参加したことが新しい読書の仕方を会得する契機となった。この参加をきっかけに、自身の考え方に次の変化を発見したという。

結構そのあと新聞とか読んだら、マルクスの資本論が出てくるので色んな今のトピックスのベースになるものなんだなって。最近、ニュースみていても自分が興味あることにしか目がいかなかったのが今は目が向くようになりましたね。知識が結びつくのが楽しくって。正直な話色んなイベントあるわけじゃないですか、意外と興味がないものに行ったら面白かった。なんかめんどくさいと思って言ったら面白くて。

食わず嫌いはだめですね。課題が出たりすると背中を押されるとやる気になるみたいな、その加減がスタッフさん上手いんですよ。

上記のこの引用から分かるのは、新たな知識が得られる喜びである。さらに、A 氏は、読書の仕方の会得といった、本の読み方に関する変化だけではなく、次の点を最も有意義なこととして挙げている。

基本的に嘱託書店員の森さんの話をきいて後で反芻して落とし込んでいく。わからないことはサブテキストになるのを教えてもらって補強していく自分のものにしていくっていう感じですね。

A 氏が上記で示してきた個人的な本の読み方の変化は、嘱託書店員の交流から生まれたものである。つまり、一人では得られないことが、相手と話をすることで出来る。その出会いが自身の知識を高めたと考えている。この交流はさらに次のような創造性を生み出している。

自分のなかで考えてても身につかないので私は「ブック・ドリンクス」で説明するためにレジュメとか書いたりすると整理できて。これやると自分の考えてきた変遷がわかります。最近は短歌をやっていてそれを発表することもあります。

上記の引用からもわかるように、A 氏には、ブックセンターでの活動が自身の創作物を他者に発信する機会につながったと感じられている。自分の創作物に批評を受けることで創作物が修正されるため、ブックセンターは A 氏にとって単に交流の場ではなく、創造のきっかけの場にもなっているのである。単に交流だけではなく、創造性が機能しているといえる。

このように、A 氏にとって、多様な本との関わり方を会得する場となっている。

②市民 B 氏の場合（60 代　女性）

最初にブックセンターと関わりを持つきっかけとなったのは、「私の本棚」に自身の推薦する 10 冊の本が並んだことである。自前ではなく施設で本が揃えられる喜び、本棚を通し自身にとって特別な本を他の来館者に伝えられる喜びを知り、B 氏はブックセンターが主催するイベントへの参加を決意する。最初に参加したのは、「ブック・ドリンクス」だった。

一か月に 1 回、最後の金曜日でちょうどよいサイクル。今まで手に取ったことのない本の話をきくのが面白い。10 人くらいでちょうどよくて。お話をしていくうちに身近な繋がりがあるということもわかって楽しい。子どものころの友達の娘だったりね。それから、今度こういうイベントがありますよっていうのがあれば興味があればとにかく参加しています。

上記の引用から開催する頻度や参加人数などの条件が相まって、B 氏が他の受講者との交流を活性化しており、新しい本との出会いや旧友との再縁が生まれている様子が伺える。さらに、この経験において見出された楽しさが、他のイベントへの参加意欲に繋がっている。続いて B 氏は「ギャラリートーク」に参加をし、これまでのなかで印象的だった内容に、「ギャラリー展　オープニング記念イベント　太田泰友さんによる作品解説」や、「ギャラリー展　オープニング記念イベント　太田泰友さんによる作品解説」を挙げた。

太田さんの話を聞いたあと、それからふと思いたってかまぼこの板を使って本を作ったのね。結構おしゃれだったよね。イベントとか読書会でみんなに配ることもあります。今年６月にあったイベントでは、編集者の方がすっかり出来上がる前の本と完成した本を一緒に本屋さんに送ってこういうのができたんですって実際に読ませて頂いたけどすごかった。本のカバーとったら違う絵がついていたりとかね。だから中だけみることは、今はない。

まず、太田氏によって、B 氏は創作活動への参考の機会を得ている。実際に、B 氏はこのイベントを機に作成した豆本を、「ブック・ドリンクス」や「本のまち八戸ブックフェス」において配布している。筆者も B 氏から実際に 1 冊もらった。豆本の表紙に、自身が好きな小説のそれがプリントされていることが印象的だった。ここから同施設における他者との交流の際に、その豆本が名刺代わりとなり、本にまつわる交流が生まれることが推察される。

次に、6 月に開催されたイベントは、B 氏にとって、ブックデザインへの興味が生まれる契機となったようだ。二つのイベントに参加することで読むものとしての本に加え、物としての本への興味が広がっているからである。

このように、B 氏にとってブックセンターは多様な本の魅力に触れる場となっている。

③市民 C 氏の場合　（60 代　女性）

C 氏がブックセンターに通うきっかけとなったのは、新聞を通して、「アカデミックトーク」、「シリーズアートを読む」を知ったことである。絵画が好きで日頃から美術館へ通っている C 氏は、東北地方に位置する文化施設の関係者が展覧会の解説を行っているこのイベントに関心を抱いた。実際に参加をして、次の引用のような体験をした。

岩手の時は高橋さんが、新幹線がない時代に何十時間かけて東京にいってみたっていう展示のカタログもってきていて皆で回覧したんです、家にいて図録を見ているだけでは、そういう体験はできないのですごいなと思いました。

上記の引用から分かるのは、他者と共有しながら本に触れる楽しさ（下線部分）を得ていることである。それは、参加者との交流、文化施設の関係者との交流から生まれたものである。つま

り、人との交流によって、一人では得られないものを得ることが出来ると感じられているのである。この点は、先に取り上げてきた、書店員との交流をきっかけに新しい読書の仕方を会得したA氏の事例と類似している。

さらに、人との交流は、自身の文化施設との関わり方に以下の変化を促した。

人との繋がりもできましたね。説明してくれる美術館に出向いて向こうの話も深く聴ける、このイベントに来なければそういうことは体験できなかったと思います。

上記では、このイベントに参加をしたことを機に、文化施設の学芸員と近しい関係性が創出された様子が伺える。さらに、これは、以前は展覧会を鑑賞するだけだったが、文化施設でイベントとは異なる別の視点から解説を聴くことが出来た点において、新たな知識を得ることにもつながっている。

このように、C氏にとって、多角的な知識の受容が行える場となっている。

④市民D氏の場合　（60代男性）

D氏は2019年5月、4回に渡り受講ではなく、「ヒストリーカフェ　歴史の小ネタ高座」を自ら開催した。講座を企画した理由は、かねてより定年後に自身が職務で文化財や市史編纂などに携わった経験を生かし、定年後に一般市民に歴史の面白さを伝える活動を行いたいと考えていたためである。D氏は、近年、公民館での講座でも受講者が年々減少しており、歴史に対する世間的な関心が低迷している点を危惧していた。そこで、夜遅い時間帯まで開館し、自由にドリンクが飲めることで、一般の市民が参加しやすい環境にあるブックセンターを会場に選んだ。結果的に、次の引用のような活動を行った。

イベントはテーブルを囲む形でやって、1回につき約10人が参加しました。出来るだけつまみ食いの方向で来た人の関心に合わせて進めています。五月の状況をみると仕事帰りというより歴史好きなんだなっていう人が来る感じでしたね。あと、「読書会ルーム」を使えたことについては武器を一つ増やしたなって感じはしますよね。気楽な感じでちょっと真面目な話もしようよとそういうことをしようとする場合にはここは良いなと思います。そこは確認出来たと思います。

D氏は歴史好きよりも一般の人に立ち寄って欲しいと考えていたが、実際には歴史好きの人が集まってしまった。しかし、D氏が自分の伝えたい方法をこの場で新しく得た実感を持っている。

このように、想定とは異なる事態が生じたが、読書会ルームを活用することで、彼の実践したかった知識の使い方が可能になると、D氏は捉えている。

⑤市民E氏の場合

八戸工業大学で教鞭をとる E 氏は、懇談会メンバーとしてブックセンターと関係性を持ち続けてきた一人である。この懇談会は「設立にあたって知識層や一般市民の意見を徴収する」ことを目的とする。E 氏は、ブックセンターが開設した当初から、イベントの参加や企画を行い、積極的に施設を盛り上げている。

「アカデミックトーク」では、講師として「本で八戸サ繋がる」を題目に、自身と本との繋がりについて語った。実際にイベントには、大学の関係者やビブリオバトルの出場者、たまたま通りかかった若い女性、福祉関係の仕事に従事する男性など、様々な経歴を持った人が参加した。このイベントにおいて講師の経験は初めてだったため、企画の趣旨に沿って話を進めることに最初は困難を感じたが、「話を程よく切るスキル、他の人に回すスキル、人の話を引き出すスキル」を知ることとなった。つまり、このイベントは、自身の講義に応用可能なトークスキルを会得する契機となった。さらに E 氏は、自身の考え方に以下の変化を発見した。

工学系のように「モノをつくる」とか「社会に役立つ」とかが見えづらいのですが、そうではなく、「具体的に便利になる」とは違った「本の価値」について、より考えるようになりました。

上記のこの引用から分かるのは、ブックセンターに来館するようになって、E 氏の本の価値観が変容したことである。この変容は、さらに次のような試みを生み出している。

ブックセンターでやってみたことは授業でも応用したりするんですよ。（前略）前よりも読書を授業のなかに取り込むようになった。それまでは、漢字、ことわざ、一問一答みたいな感じの授業だったんですけど。

E 氏の本の価値観が変容したことは、上記で示したように、学生たちに、本の内容を味わうことの大切さを教えることにもつながっていたのである。

こうした活動をきっかけとして、E 氏が顧問を担当する大学の文芸愛好会[34]は、2019 年度の「本のまち八戸ブックフェス」におけるブースの出店を行った。さらに、彼らのなかから「カンヅメブース」で執筆した小説で賞を受賞する者が生まれるなど、直接の影響であるかは明確にはならないが、ブックセンターとの接点を持ったことが文芸愛好会の活動に影響を与えたといえるような事態も生じている。

また、E 氏は、自身でも「『八戸工業大学公開講座』やっぱし、ふるさとことばじゃ！―本と方言と、時々アンケートー」といったイベントを企画した。このイベントでは、学生と立ち上げた方言研究会の活動成果を発表した。E 氏はイベントを振り返り「完全に方言の説明寄りであまり「本」を活かせなかった」点を意識していた。しかし、これを機に、別の場所で発表を行う際

[34] 八戸工業大学 HP を参照。

に、ブックセンターの職員が聞きにきてくれるようになった。つまり、このイベントを企画したことによって、人との交流が生じたのである。さらに、交流は、次のような意識を生み出した。

はっちで公開講座やった時に、地域の方言好きの人に新しく 65 くらいデータを追加してもらったんですよ。それをブックセンターでももう一回やってみたいなと思うんですけど、その集客がネックでいつものメンバーにならないようにかつ方言に興味があって新しい言葉を入れてみたいわっていう人たちと一緒にやってかないといけない。

このように、交流が生まれた経験をもとに、さらに E 氏は今後方言に興味のある別の団体との交流を行いたいと考えるようになっていた。実際に、E 氏は今後知り合いの繋がりによって地元キャラバン隊に連絡をとる方向性を検討しているという。つまり、E 氏は、このイベントを企画したことが、所属する方言研究会の活動に新しい取組を生むきっかけとなりえると考える。

E 氏にとって、自身の所属先に応用可能な活動の実践を行う場となっている。

(2) 市民団体の場合（八戸市内）

①八戸学芸員倶楽部の場合

八戸学芸員倶楽部は、2 回に渡り企画を行っている。この団体は、「八戸市内の図書館、博物館、美術館、是川縄文館、街角ミュージアムなどの学芸員の有志で構成されており、2 か月に 1 回、各々の研究に関する情報交換会や勉強会を実施している。

読書会ルームを活用した経緯について、会員の一人で八戸新美術館建設推進室に勤務する F 氏は、「内容的に結構面白い話なので仕事や勉強会と関係なしに一般の方にも話す機会を作ってみてはという案が出て、人数的にもサイズも丁度良かった」と語る。

まず、八戸新美術館建設推進室に勤務する G 氏が、妖怪をテーマにトークイベント[35]を行った。このイベントは、第 1 部「『妖怪』って何？」、第 2 部「美術ならここまで分かる『妖怪絵解き』」、第 3 部「イチオシ妖怪本紹介」の順で三部構成されている。実際に、実施した結果、G 氏は、以下のような機会を得られた。

仕事上の来場者に説明する際の言葉の選び方とか表現の仕方とかテンポの取り方を学ぶ機会となった。

G 氏にとって、上記でトークイベントを行ったことが、自身の仕事場においても生かすことのできる話の伝え方を磨くきっかけとなった。つまり、ここでは、読書会ルームは、職場において取り入れられるスキルを磨く実践の場として機能したといえるのである。

[35] 2018 年 2 月 26 日、読書会ルームにて実施。

次に、八戸市教育委員会の社会課に所属するH氏が、「民俗学学芸員によるフィールドワークと本の紹介～歩く・見る・聞くの実践とススメ」[36]をテーマにイベントを企画した。このイベントは、民族研究の手法を一般の人に伝授する内容となっている。参加者は約20人で研究活動のなかで知り合った知人や、民族の分野に関心を持つ人が多かったという。この企画を開催した結果、G氏は次の点を有意義なこととして挙げている。

本をベースに話せたことで研究をベースに話せたことは新鮮だった。さっき話した場所が研究室みたいで大学のゼミ発表のような感じだと思いました。皆でテーブルを囲みながら資料を見ながら、という状況ですね。社会人になるとまあ得難いものになるので学生時代を思い出して楽しかったのでまたやってみたい。

G氏が上記で示しているような、日常では得難い本の共有の経験は、同じ分野に関心を持つ人との交流から生まれたものである。つまり、一人では得られない経験が、この場の他者との出会いによって可能となったのである。また、この場がG氏にとって、とても居心地の良いものとして感じられている様子が分かる。

さらに、このイベントに同席したF氏は、次のような意識を持った。

アットホームな雰囲気が出来たので、例えば博物館とか美術館の講座をする時にそういう形態も可能であるという、確認と実験の場にはなった。

F氏は控えめに発言しているが、上記のこの引用からここで得た他者との交流のあり方が、自らの本職の仕事場に応用しようとしていることが分かる。

また、F氏によれば、このイベントによって参加者は、次の引用のような体験をした。

八戸って街の方と山と海って大きく分けると三つの地域でできている町なんですね。市自体がそれぞれ地域ごとで結構文化が違う。まず、方言がそもそも違ったりするんです。参加者の結構若い方だったんですけど、20代30代くらいの若い男性でその人は自分が住んでいる地域が八戸のなかでは特徴的な地域だったということを自覚されたみたいで。

上記の引用から分かるのは、このイベントが参加者にとって単に知識を受容するだけでなく、自身のルーツを知る役割を果たしているとF氏が感じていることだ。

ただし、F氏は、実際に二つイベントを実施した結果、外部に活動の趣旨が伝わりにくかった点を課題として挙げていた。次回は、「本という媒介する同じテーマの先にある、深いテーマに

[36] 2018年6月10日、読書会ルームにて実施。

興味がある人たちに届くような広報を調整したい」と語る。

このように、読書会ルームは、八戸学芸員倶楽部にとって、仕事場に応用可能な実践を行う場として機能しているといえる。

②読書団体の場合

八戸市内の読書団体は、団体の活動である読書会を開催している。読書会ルームを活用した理由は、活動場所の確保に課題を抱えていたためである。ブックセンターが開設される前は、読書団体のなかには、図書館の集会室で活動している団体も多く、団体同士の活動日が被ってしまうことも度々起こった。実際に、読書会ルームに活動拠点を移した読書団体のＩ氏は、活動のなかに以下の変化を発見した。

以前は拠点が図書館のみで他の人に活動を知ってもらう機会が少なかったのですが、読書会ルームは通りながらでも入ってもらいやすい気がします。

Ｉ氏は、上記の引用のように、読書会ルームを活用したことで読書団体に対する一般の市民の認知度が高まったと感じている。同様に、読書団体のＪ氏も次の引用のように捉えている。

読み聞かせをした時に「本のまち八戸」を意識したことで宣伝効果がありました。「八戸ブックセンター」に読書会のチラシを作ってもらえ、施設にチラシを置いてもらえる。さらに、「ひと棚」で本の紹介もしているので今までよりも市民に読書会を認知してもらいやすい環境にあります。

上記の引用で分かるのは、Ｊ氏もＩ氏と同様にブックセンターの職員の力を借りることで、市民への読書会の認知が高まったと感じている点である。さらに、Ｉ氏は、一般の市民の認知度が高まっただけでなく、次の点が有意義であるとしている。

読書会自体もドリンクが飲めるため柔らかい雰囲気が出ました。読書に興味のある人がブックセンターの人に声をかけて新たに入られたという例もあります。

自由にドリンクが飲めるというブックセンターの利点もあり、参加した人々が読書会に独特な居心地の良さを感じているようである。つまり、図書館とは異なって、人々が参加し交流しやすい場所という認識があり、読書とは違う参加のしやすさがある。そうＩ氏は考えている。

このように、読書団体にとって、これまでと異なる多様な交流が可能となる場としてブックセンターが捉えられている。

(3) 一般社団法人八戸市読書団体連合会の場合

八戸市内の 16 つの読書団体[37]を取りまとめる一般社団法人八戸市読書団体連合会（以下「読書団体連合会」という）は、様々な場所で読書会を行っているが、読書会ルームを会場に利用する理由として、前田氏は、少人数でも使いやすい点を挙げている。前田氏によれば、ブックセンターの開設以前、図書館で読書会が行われていたが、現在は会の趣旨によって使い分けが出来るという。これは読書会に次の変化を促した。

少人数の時は、読書会ルームを活用します。飲みながらできて、以前よりも雰囲気が柔らかい囲気になりました。

上記の引用のように、読書団体の例と同じようにドリンクを飲めることは居心地の良さを生み出しており、活動場所の使い分けに繋がっている。

さらに、ブックセンターを活用したことによって、次のような出来事が生じた。

近年、読書団体連合会の活動の一つである「作家を囲む読書会」は、作家をなかなか呼ぶことが出来なくなったため休止していた。しかし、ブックセンターの職員と交流する機会を得て、企画に関わった作家を紹介してもらえたことで再開することができた。

読書団体連合会 50 周年記念の「作家を囲む会」の活動では、ブックセンターが過去に『パワープッシュ作品』として取り上げた『月の満ち欠け』の作者である佐藤正午氏を招待した。このように読書会ルームの活用が、読書団体連合会が抱える活動の調停という課題を解決することへつながった。つまり、ブックセンターの職員との交流により、読書会の活動の活性化が得られた。

また、L 氏によれば、読書団体連合会自体においても次の変化があったという。

市読連は市民に認知されていないイメージだったが、近年では八戸市近隣の読書団体も参加したいという話が出てきた[38]。

こうしたブックセンターとの交流から生まれた活動を通して、八戸市内だけではなく八戸市外の読書団体の活動を促すことにもつながった。このように、ブックセンターの存在は、八戸市内だけでなく、近隣の市町村の読書団体の活動にも影響を与えているといえる。

（4）県外の市民団体の場合

---

[37] 長者読書会、三八城読書会、えほんクラブ・えがお、八高読書会、北高読書会、東高読書会、みなづき読書会、M9 読書会、映和読書会、ごのへ読書会、八戸・賢治を語る会、萌読書会、更紗読書会、リオンの会、松風会、ひとやすみの会。『一般社団法人　八戸市読書団体連合会創立 50 周年記念誌　文車』（2018）を参照。

[38] 青森県五戸町を活動拠点とするごのへ読書会が参加。

①NPO 法人共存の森ネットワークの場合（青森県外）

NPO 法人共存の森ネットワーク（以下「共存の森ネットワーク」という）の代表である K 氏は、「高校生向け取材編集ＷＳ『袖のみちかけ』」[39]と題した「聞き書き甲子園」を実施した。「聞き書き甲子園」は、毎年全国から集まる 100 人の高校生が、主に 10 代 20 代のメンバーから取材の方法を学び実践する活動である。この活動をブックセンターで実施した理由は、共存の森ネットワーク代表の K 氏は、地方には「聞き書き甲子園」の存在が知られていないが、取材や表現活動に興味がある若者が集まっていると感じたためであると述べる。実際に、ブックセンターが宣伝をした結果、八戸東高校の生徒が 2 名参加した。

このワークショップは、以下の内容と手順で行われた。

1：読書会ルームを暗くして、高校生でダイアログを実施した。
2：街のどういった人に取材したいか、取材した成果をどのようにまとめたいか。ここで冊子、ポスター、イベントなどを決め、ハンドメイドをテーマに取材することとした。
3：高校生が取材先にアポ取りをし、取材を実施した後、書き起こしをした。
4：書き起こした原稿を編集するワークショップを行い、高校生に編集方法を指南した。
5：編集した記事などをまとめて冊子化し、ブックセンターや取材先に寄贈した。

上記のワークショップを終え、K 氏は、次の点を最も有意義なこととして挙げた。

参加してくれた高校生の一人はもともと経営学部に進学しようと考えていたのですが、「袖のみちかけ」での出会い・取材を経て、自分はやっぱり表現がしたいんだと気づいて、現在は東北芸術工科大学に通っています。そんな変化が一番嬉しかったです。

上記のこの引用から分かるのは、参加者の高校生に創造の楽しさを伝えられた喜びである。この活動が直接の契機であるかどうかまではわからないが、大学の進学を変更するようなアイデンティティを見つめ直す機会をこの高校生に与えたのではないか。そう K 氏は考えている。つまり、このワークショップが若者のアイデンティティの形成に貢献していると考えているのである。さらに、この経験は、共存の森ネットワークの活動に次のように生かされている。

八戸の活動をもとに、今年から静岡県の菊川市で常葉高校の生徒 5 名と大学生たちと取材編集の企画を始めています。

[39] このワークショップでは、カネイリミュージアムショップ、是川縄文館など文化施設の関係者などを取材対象としている。取材内容は『はちのへ　ハンドメイド』として冊子化された。

共存の森ネットワークにとって、ブックセンターでのワークショップは、新たな企画へと道を開き、今後の活動に対するモデルを生み出した。

なお、「聞き書き甲子園」は 2019 年度から協力市町村を公募し、高校生の取材を地域で受け入れてもらう活動を開始している。こうした活動開始の直接的な理由にはなっていないが、K 氏にとって、ブックセンターでの活動は、地方においても取材や表現活動に関心を持つ高校生が集まっている事実を確認出来た機会の一つとなったことが推察される。さらに、来年度の活動に、八戸市が応募したことが明らかとなっている。このことから、ブックセンターでの活動を通し、「本を書く」という同じ志を持つ団体同士が協力し合える関係性が創出されていることが分かる。

このように、ブックセンターでの活動は、共存の森ネットワークにとって多様な活動の実践を開く場となったのである。

（5）文化施設における関係者の活動

ブックセンターが主催する様々な企画には、八戸市内の文化施設の関係者が講師として招かれているものもある。以下その活動について整理する。

①八戸クリニック街角ミュージアムの活動

八戸クリニック街角ミュージアム（以下、「ミュージアム」という）の館長を務める M 氏は、「アカデミックトーク」、「シリーズアートを読む」において、2 回に渡って企画展[40]の解説を行った。

このイベントでは、パソコンを活用しプロジェクターで作品を紹介する。J 氏によれば、以前はミュージアムで展覧会の解説を実施していたが、ブックセンターの企画を活用している。結果、自身の考えに次の変化を発見したという。

本も見られるっていうことで来る人の知識の幅が広がりますよね。展覧会だけでは伝えられないものっていう機会があったっていうのは非常に良かったと思います。（省略）「ひと棚」があるので、それで知ってくれるお客様もいます。一応双方向の人の流れもそれなりにあるのでそこは良いと思います。

M 氏は、上記で本を活用した解説をしたことが、ミュージアムにおける新しい客層を獲得することへつながったと考えている。また、ブックセンター側も、遠方に住むミュージアムの客層が来聴した点において、ブックセンターの存在を発信出来たと感じている。

現状はうちの講演の場所を借りているっている感じが強いかもしれない。せっかくブックセンターがあ

[40] 2018 年 10 月 28 日には「「世界が認めた美」を深く読む」を、2019 年 6 月 1 日には「街角ミュージアム春期展　能楽百番」をテーマに解説している。

るので、こっち側が工夫をしたり、ブックセンターともちょっと話をして独自のものを作らなきゃいけないよなとは感じています。

M 氏はブックセンターの良さを認識しつつも、まだまだブックセンターの施設や使い方に関しては、工夫する余地があると考えているようである。

②青森県近代文学館の場合

青森県近代文学館（以下「文学館」という）は、2018 年 12 月 16 日、「アカデミックトーク」、「シリーズアートを読む」において、「太宰治を読み直す」をテーマに企画展の解説を行った。同施設で文学主幹を務める N 氏によれば、文学館は常勤職員が 3 名であるが、極力出前講座のオファーは引き受けるという。ブックセンターにおいても「太宰治没後 70 年―秘蔵資料大公開―」の会期中にトークを実施した。同施設の読書会ルームでは、青森県近代文学館で実施した日曜講座の資料をベースにアレンジを加えて講話した。

このイベントには、10 代から年配の方まで幅広い世代が 19 名参加した。当日は、青森市から文学館の常連客も数名駆けつけ、励みになったという。実際に、N 氏は、イベントを実施した結果、自身の考えに次のような変化を発見した。

当館は明治時代以降の文学資料を収集・保存の対象としている関係で、どうしても過去の作家の顕彰に労力を注ぎがちですが、ブックセンターさんでは流通している本と人々とを結ぶという性格上、現在活躍中の方々の紹介に重きを成した活動が可能ということに思い至りました。ともに本の魅力を伝える施設でありながら得意領域は異なることを感じ、これまで以上にブックセンターさんとの連携は有意義なことだと考えるようになりました。

N 氏にとっては、上記の引用のように、ブックセンターとの連携が、文学館の企画に応用可能な発想を得る機会となった。

ブックセンターに対する「本のまち」や「読書のまち」というフレーズには、ともすれば掛け声倒れに終わりかねないリスクが潜んでいる。だが N 氏には「本のまち八戸」を実践し体現する確固とした存在として認識されているのである。文学館とは距離的な隔たりがあるものの、今後も連携を行う方針を示している。

また、実際にイベントを実施し、印象的だった点を次のように述べている。

お客さんが好きな飲み物を必ず何か一つ注文して、飲みながら開会を待っておられる様子に、ちょっとした非日常の空気が感じられ、私としては大変新鮮でした。

上記の引用からもわかるように、N 氏にとって、ブックセンターでの活動は自身の文学館の取

組を見直すきっかけとなっているのである。

（6）民間書店の場合

市内書店個性化プロジェクトは「市内書店から希望を募り、その書店の個性や立地上の特性、スタッフの関心領域などに合わせて、個性ある棚づくりをサポート」することを目的にブックセンターが計画した事業である[41]。その一環として 2017 年度から読書会ルームでは情報交換会が開催されている。このようにブックセンターが出来たことによって、民間書店にどのような影響を与えたのか、以下整理する。

①伊吉書院類家店　書店員 O 氏の場合

コミック担当の氏は、情報交換会に定期的に参加をしている。実際に、情報交換会に参加をして次の引用のような体験をした。

もともと個性が違う店なので、他のお店でうまくいっていることをこっちで取り入れてうまくいくとは限らないですけど、ただ、そういう話合いをしないとずっとやっぱり視点が凝り固まっちゃうっていうのもあるから、うちでも取り入れてうまくいきそうなことっていうのはもちろん真似したりすることもありますし、ちょっと難しいってことについては見送ったりすることもあります。

O 氏にとっては、情報交換会で得た情報が売り場づくりの参考になっているという。こうした情報交換会での活動で、積極的な情報交換の必要性を感じ、SNS を通して本や売り場づくりに関する情報を交換し始めたという。

また、O 氏はブックセンターの開設後、店内の児童書の売れ行きが伸びたと話している。この点において、ブックセンターの職員らが小学校で行う「ブックトーク」が有意義な活動となっていると実感しているようである。

②カネイリ番町店　書店員 P 氏の場合

書店員 P 氏は、情報交換会に出席している。実際に、情報交換会に参加し、次の点を有意義なこととして挙げている。

本来、書店さん、今までブックセンターさんが出来るまでは、まあちょっと見に行く程度じゃないですか、こういうふうに売り出しているんだっていう、例えば写真はスライドを使ったりとかっていう形でこういう風にやっていますよ、この次にはこういうのを置いてっていうお客さんの目を引いて、ああ、そういう出し方あるかっていうのは、非常に面白いなと思います。堂々とみられるじゃないですか、しかも説

[41] 『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 30 年度版）』(2019) を参照。

明つきで。

P 氏にとって、上記で情報交換会に参加したことが他店の運営方法を知る契機となった。P 氏は、これまで他店の売り場づくりを知る機会は出張のみだったが、情報交換会では、規模の近い書店の情報を得られるのでありがたいと語る。さらに、他店の運営方法を知ったことで、自店舗の運営を見直す考えが生まれたという。

どういうふうにこっちで生かすか、書店の方の課題もあるっていう気はありますよね。どうしても忙しさにかまけてやりたくても手がつけられないとか。あるいは、この店では会うけどこの店ではあわないってあるじゃないですか。それをどういうふうに自分の店に落とし込んでその店らしい形で展開できるか、店の方ではもうちょっと考えてやらなければ。

上記の引用にあるように、他店の運営に関する情報を得ることが、自店舗の運営方法を見直すきっかけとなったという。

さらに、情報交換会において、次の点を最も有意義であることとして挙げている。

企画力があるのでブックセンターさんはうちらを巻き込んで書店を巻き込んでの企画、まあ、今でいうブックフェス、マチニワのブックフェスみたいなのを企画運営してくれるので個人的にやろうとしてもできないじゃないですかこういう風に参加できるっていう機会を与えてくれるのはありがたいなとは思いますね。

つまり、情報交換会に参加したことが、企画を実施するきっかけとなった。ブックセンターとの交流が、個人で行うことの出来ない企画を創出したといえる事態が生じている。

今後、ブックセンターとの連携については、P 氏は、現在の関係性を続けながら、企画に乗りたいとしている。

このように、カネイリ番町店にとって、ブックセンターの存在は、自店舗の運営方法を見直す場と考えられているのである。

③木村書店　書店員 Q 氏の場合

ポップ担当の書店員 Q 氏が情報交換会に参加している。情報交換会に出席し、実際に次の点を有意義なことに挙げている。

他の本屋さんでやっている取組を木村書店にそのまま取り入れるということは正直ないです。ただ、各本屋さんの特色をそれぞれの書店同士で把握するということが成果というか。今まで社長はともかくとして各書店員が話す機会というのはほとんどなかったんですね。売り場を仮に見たとしてもそこの売り場づ

くりの細かいところとかをきく機会とかっていうのは全くなかったんですよ。

上記からもわかるように、Q 氏は、情報交換会に参加したことは肯定的に捉えている。しかし、自らの店舗に生かすというまでには至っていない。

市民からは賛否両論あるとは自覚しつつ、取組自体は書店員さん、本当に熱意のある書店員さんがプライベートで面白いと思った本、仕事上で今までの経験上で面白いと思った本を集めているので、それ自体が各書店の刺激になっていることは確かです。なので、県外の人からは八戸ブックセンター本のまちどうですかって聞かれたときに私はそのアイコンとしてそもそもそこにあってくれること自体が助かるっていうふうに思っていますね。

書店員 Q 氏は、ブックセンターができた後の情報交換会などの新たな試み・取り組みが、自店舗の顧客だけでなく、地域や全国の人々に八戸市が本のまちであることを発信する象徴的な場所を生み出すものになったと感じている。

このように、ブックセンターによって生まれた情報交換会は、木村書店にとって他の本屋とのつながりを創出する場として捉えられているのである。

④成田本店みなと高台店　書店員 R 氏の場合

成田本店みなと高台店では、書店員 R 氏が、情報交換会に参加している。その際、本屋同士に次のような変化を発見したという。

あれができたおかげで私たちも横のつながりができた、だって基本ライバルだからさ。本当はね、商売的には。それを考えるとブックセンターが出来たことってつなぎになっているからあれは大きいかな。

書店員 R 氏にとって、上記の引用のように情報交換会に参加し、横の繋がりを得たことで、本屋同士の繋がりを生むきっかけとなったという。さらに、本屋同士の繋がりは次のような交流を創りだしていると考えている。

ツイッターみて、伊吉さんこんなこともしているんだって。子どもに感想を書いてもらう紙を準備して。児童書担当にちょっと伊吉さんすごい頑張っているよって、見せた覚えがあります。

上記の発言は、R 氏が本屋同士の繋がりが出来ることで、本屋の運営方法が改善されるきっかけとなっていることを示している。さらに、R 氏は次のような見解を述べている。

うちの店だけじゃなくて、ここ皆で何かやりましょうみたいなことが、今ブックセンターがやろうとし

てることなんだけど、ちょっと売っているものがキャッチ―だから爆発的に売れるというところまでは行っていないけれど、書店側から静岡や青森みたいに八戸の地域として仕掛ける本を出したい。そうなると全部の本屋さんとお付き合いしなきゃいけないので、もう一段階上がるかもね。

上記の引用のように、本屋がブックセンターの企画に参加するだけでなく、自ら本のまちとして盛り上げるために、自らイベントを企画する考えを示している。つまり、ここではブックセンターの存在に触発されて新たな自分たちの企画を生み出そうという、創造的な意識が生まれていると考えられるのである。

4-1-2. カンヅメブースについて

「カンヅメブース」は、外部へ発表することを目的とした創作活動のために市民が活用することの出来る小部屋である。利用時には、市民自らが行う創作活動の趣旨、好きな作家や本、創作活動への意気込みを用紙に記入し、市民作家登録が必要となってくる。市民作家登録を終えると、同施設が主催する「執筆・出版ワークショップ」への参加が可能となる。カンヅメブースを活用する市民がどういった目的で創作をしているのかを整理したうえで、ブックセンターがカンヅメブースにおいて計画段階に目的として定めた施設機能がなされているのか、整理するものとしたい。

(1) 市民 S 氏の場合（60 代女性）

「むら次郎の会」に所属する S 氏は、詩画展で発表する目的で、詩の創作に活用している。

S 氏が詩を外部に発表し始めたきっかけは、生前に単身赴任をしていた夫が、自宅に帰る時に S 氏の創作する詩を読むことを楽しみにしていたことを思い出したからである。娘の家族と同居し始めてからは、一人で落ち着いて創作出来る場所を探した。こうした経緯が、カンヅメブースを利用したきっかけである。実際に、活用を続けた結果、次の引用のような体験をした。

テーブルにも、下敷きも、座り心地が良くて書きやすい、ライトもちょうどよい。家を建てたんで私一人になったから、カンヅメブースいかなくてもいいかなって思っていたんだけれども、でも、やっぱり雰囲気は良いなって思って。

上記のこの引用から分かるのは、S 氏にとって、カンヅメブースが居心地の良い空間となっていることである。つまり、その居心地の良い空間が、創作行為を促進しているのである。さらに、この活用を機に、次のような発見をした。

書こうと思うといつも色んなことに気をつけている。こういうことがあったっていう小さな感動をいつまでも頭にとめといて、出来上がったものっていうか、お風呂に入っているときとか、台所で調理してい

るときとかに、それを考える。書く時には、だいたい決まっているけど、ここに置いた時ってああでも、この言葉ちょっと違うよなって思いながら書く。充実感というか、出来た時にはやっぱり嬉しい。ただ書きたいだけじゃなくて、そういう風にすすむ人のためのカンヅメブースじゃないのかなって思うんです。自分の踏ん切りっていうか、ただただ書いてるんじゃなくって。

S 氏にとって、上記から分かるのは、精神的な充実感が得られた喜びである。こうした充実感がカンヅメブースの利用から促進されている。言い方を変えれば、この空間そのものによって、創造行為が生み出されていると S 氏は感じているのである。さらに、こうした行為は次のような交流を促している。

詩集を印刷して、30 日に古本市があると思うんですけど、そこに二冊出そうと思っています。娘たちがカットを入れてくれるので、そのカットに助けられて決めました。

上記の引用からは、S 氏にとってこの場所が、創造を生み出す空間であることに加え、精神的な充実感が与えられることで、他者との交流を生み出すきっかけの場にもなっていることが読み取れる。

(2) 市民 T 氏の場合（60 代女性）

俳句創作サークル「紫雲の会」に所属する T 氏は、俳句の創作で活用している。モスバーガーやドトールコーヒーとは違い、無料で集中して執筆活動を行えるため、カンヅメブースを活用し始めたという。

T 氏は友人に誘われて俳句を始めた。最初は初心者の集まりで難しいと感じたが、実際に活用してみて、自身の考え方が次のように変化したことを発見した。

俳句の場合、約束事として主語が私なので結構自分の言いたいことがたまに私こんなこと思っていたの、みたいなのがぽろっと出てきたりする。句会で発表するためにカンヅメブースで書き溜めていたメモを見ながら句を練る。

上記の引用から分かるのは、俳句を創作する面白さを得られた喜びである。実際に俳句を執筆する過程で創造行為が自身の生活と結びつくものだと知り、その面白さが意識される様子が伺える。

カンヅメブースの利用者について、T 氏は、「最初はどのくらい市民作家登録をする人がいるのかと思ったが、想像以上に多いことに驚いた。八戸市から市民作家が出たら面白い」と語る。自身も、将来的に本を出版する考えであるという。

このように、T 氏にとって、創作行為の面白さを得られる場となっている。

4-2. まちなかに集う人々

本節では、八戸ブックセンターの外で行われているブックセンターの企画や取組について整理する。

4-2-1.「本のまち八戸ブックフェス」に集う人々

市民が憩い自由に活動を行うことをコンセプトに作られた「マチニワ」で、年に一度「本のまち八戸ブックフェス」が開催される。このイベントは、毎年規模が拡大しており、2019 年には八戸市内の民間書店だけでなく、全国から一箱古本市、図書館、出版社など本の関連機関が参加をした。

本項では、実際に「本のまち八戸ブックフェス」に集った市内の民間書店や八戸市立図書館がどういった活用されているか。本項は、その実態を整理する。

（1）民間書店

「本のまちブックフェス」（以下「ブックフェス」という）に参加したカネイリ番町店、伊吉書院、木村書店、成田本店みなと高台店は、テーブルで出店を行った。

カネイリ番町店の P 氏は、2019 年度の「ブックフェス」では、昨年度とは違い、本の関連機関が同じ形でブースに配置されていたため、全体的に統一感が出たと語る。

本屋に関しても、今年はちゃんと食に関する本を出店するという統一テーマを決めています。大きいテーマ一つあって好きに選書、あるいはその店独自の強みのあるものを展示してくださいっていうことね。木村書店さんが白雪姫の書籍とブルーの毒りんごをセットで販売していて面白いと思いました。

上記の引用において、このイベントの参加が本屋の個性を可視化させるきっかけになったと P 氏はいう。つまり、統一テーマのもとに出店を行うことで、逆に本屋の捉え方に違いが生まれたため、それぞれの個性が発信されやすくなったのである。この点に関しては、情報交換会でのやりとりも影響していると考えられる。

また、木村書店の Q 氏は「ブックフェス」において、次の点を有意義なこととして挙げている。

年に一回でもブックセンター主催でブックフェスやっているのは、市民の人に八戸市自体が本のまちっていうことを自覚してもらえる大きな方向性になる。うちの本屋だけじゃ何もできないっていうのはあるので、ブックセンターの人とかの意見交換を行いながら、そのなかで木村書店にしかできないことを大事にしながらやっていけたらいいなって思っています。

Q 氏が示した上記の引用のように、「ブックフェス」は、読書文化において、地域の発展に貢献をする意識を生み出している。Q 氏は、「ブックフェス」に参加し、自身の本屋だけでなく、「本のまち八戸」の本屋が全体で企画を行えば、それぞれが発展することが出来る可能性を発見した。

このように、本屋にとって、地元の本屋として発展することを意識する機会となっている。

(2) 図書館の場合

八戸市立図書館は、マチニワの建物の脇に移動図書館車を展示した。八戸市立図書館は、日常的な業務として「資料収集、資料の解読、整理、保存、提供、貸出、予約、レファランスサービス、複写サービス、市史講座、読み聞かせ会、移動図書館」を実施している。

ブックフェスでこの展示をした理由について、副館長の U 氏は次の点を挙げている。

移動図書館車が市内の 50 カ所のステーションを月に二度の頻度で回っていますが、市民の方のなかには知らない人も存在します。「本のまち八戸ブックフェス」では、「移動図書館車の存在を市民に知って欲しいと思って展示をしました。

上記の引用では、U 氏にとって、「ブックフェス」が日常的に提供している移動図書館を市民に発信する場となっている。

このように、U 氏にとって、日常的に提供するサービスを市民に発信する場となっている。

3-2-2.「ブックトーク」に集う人々

ブックセンターは大人を対象とした施設であるが、「マイブック推進事業」において「ブッククーポン」の配布と同時に、小学生に本の魅力を伝える「ブックトーク」を行っている。

この「ブックトーク」には、指導課やブックセンターの職員のほか、八戸高等専門学校の戸田山氏や八戸市立図書館の職員が協働で行っている。本節では、彼らにとって、「ブックトーク」はどういった役割や機能を担っているのか整理する。

(1) 市民 L 氏の場合

八戸工業大学に勤務する戸田山氏は、小学校での「ブックトーク」や、小学生を対象とした「おすすめブックリスト」の制作を行っている。

戸田山氏がブックセンターを知った契機は、所属先の八戸工業高等専門学校が、文部科学省による「知の拠点大学による地方創生推進事業」(COC＋）における参加校だったことである。「知の拠点大学による地方創生推進事業」(COC＋）では、地方に人を集積させる目的で、大学が地方公共団体や企業と協働し、学生にとって魅力ある就職先の創出や、その地域が求める人材を養成するための必要な教育カリキュラムの実施を行うことをサポートしている。こうした経緯に

よって、八戸市と連携を行うなかでブックセンターの懇談会メンバーとして選ばれたという。
「おすすめブックリスト」の作成について、戸田山氏は次の考えを示している。

マイブック推進事業という事業のことをきいて何か自分にもできることがあるんじゃないかな、ただ、個人ではなかなか難しいので学校を通してっていうのも基本的には文系の学校ではないので研究活動というのもちょっと違う、うまく学生さん巻き込んでできるわけではないし、ブックセンターの方に相談してなにか小学生に本の紹介をすることをしたいなっていうのが始まりです。

上記のように、「おすすめブックリスト」の作成とは、ブックセンターとの関係を手探りで始めたなかで生まれてきたものである。「おすすめブックリスト」の作成によって、「ブックトーク」の際に、現在の小学生が愉しめるような新しい児童文学作品を紹介することが可能になった。
「ブックトーク」に関しては、戸田山氏、ブックセンターや指導課の職員、図書館の司書らが小学校に出向いている。「ブックトーク」を希望する小学校は、初年度は 1 校だったが、三年が経過した 2019 年度には 19 校まで増加した。学区内に本屋や図書館がない児童が多いため、「ブックトーク」では「おすすめブックリスト」で紹介した本を持参し、最後の 20 分間は自由に読書をさせる時間をとっている。実際に、「ブックトーク」を実施した結果、八戸ブックセンター側は、環境を整えれば、読書意欲のある児童が増えることを発見したという。
L 氏はブックセンターとの連携について、次の考えを示している。

こういった施設でやって本の話を一緒に出来る機会があることは非常にありがたいと思っています。八戸ブックセンターっていうのはもう一つの、学校は仕事する場所ですけど、もう一つの別の、自分のやってきていることを社会に向けて還元する重要な拠点です。

上記のような引用では、本の話を出来る場として強制されたものではなく、自身にとって充実感を得られる活動拠点である点において、ブックセンターに居心地の良い場としての受容的な機能を見出していることが分かる。
このように、L 氏にとって「ブックトーク」は、自身の経験を社会に還元する場となっている。

(2) 八戸市立図書館の場合
八戸市立図書館の副館長である U 氏は、2019 年度から「ブックトーク」を実施した。「ブックトーク」を依頼する小学校が、初年度の 1 校から 2019 年度には 19 校までに増加したため、ブックセンターから協力の依頼を受けたのだという。磯嶋氏によれば、2018 年度に関しては、ブックセンターとの連携は、「本のまちブックフェス」での移動書庫の展示や、年に二回程度、子育て支援課と教育指導課を交え行う「ブッククーポン」に関する連絡会議が大半であり、交流自体は多くはなかった。しかし、「ブックトーク」に協力した結果、ブックセンターとの交流に次の

変化を発見がみられたという。

会議自体は年に二回しかないので、その時に本のまち関係の館が全部集まって、状況報告とこれからの予定を話したりしていますが、ブックトーク行くのに、12 回くらい今年職員が行っているので、そのたびに連絡をとるようになりました。

上記の引用では、「ブックトーク」における連携を機に、ブックセンターとの交流が生み出されている。ブックセンターとの交流は、U 氏の考え方に次の変化を促した。

みんなが一緒に本に触れていこうっていうのを、すごくあちらの職員たちが意識して活動されているなっていうのが分かるので、私たちも、なんか出来るんだなっていうふうに気づきました。みんなにとって本が身近にあるようにという大きい目標に向かってそれぞれが、どうやって協力していこうかっていうのが必要だと思います。リスト一緒に作る。本を図書館でそろえるような出来ることしかやっていないけど、現在は少しずつ互いに出来る部分から繋がっていこうと考えています。

このように、ブックセンターとの連携は、これまで図書館が行ってきたこととは異なる、本というものへの取組を再考させるきっかけを生み出した。U 氏は、特に、ブックセンターと互いに寄り添える部分を増やし、今後も連携を進めていくことで、新たな取り組みを実現できると考えている。

第 5 章　　結論

ここで改めて、第 4 章で整理した八戸ブックセンター（以下、「ブックセンター」という）および地域に集う人々の実践及び意識を、「居場所」論の三つの分類の視点から整理することで、ブックセンターにどういった「居場所」の側面があるのかを示していく。

(1) 受容空間としての側面

イベントの参加者である A 氏の事例では、読書会の参加を機に嘱託書店員から読書に関するアドバイスを得られたことで、これまで知らなかった本の読み方に気付き、本に関わる知識が増えていく体験に楽しさを覚えていた。

また、読書団体連合会の事例では、大人数で実施する回は図書館なのだが、少人数で実施する際にはブックセンターを使っていた。そこでは、図書館の読書会とは異なった柔らかい雰囲気で活動を行うことができ、以前よりも議論がしやすいという特徴がみられた。その理由として、読書会ルームが開架式である点やドリンクを自由に飲むことが可能である点などが挙げられていた。

さらに、こうした要素は、本に触れる以外の目的でブックセンターを活用する人々を引き寄せている事例も確認された。例えば、D 氏の事例[42]においては、図書館と異なり、ブックセンターが夜遅い時間帯まで活動できるため会社員を参加者の視野に入れた企画を行えるという利点があるということも明らかになった。

第一に、自身の知らなかった知識を得ることが可能である。

第二に、居心地の良さや使い勝手の良さがある

第三に、図書館とは異なる形で本と接したり異なる条件で利用できる施設である。

こうした点において、ブックセンターは人々にとって、受容空間として機能している。

(2) 交流空間としての側面

読書団体の J 氏の事例では、ブックセンターの読書会を通じて職員と知り合い、来館者に向けて自身の団体における活動を宣伝してもらった結果、それまで団体の存在を知らなかった一般の市民が読書会に参加するようになった。ここでは、ブックセンターの職員との交流によって、活動団体の情報が、実際にブックセンターの来館者に行き届いた事実が確認された。

成田本店の書店員 N 氏の事例では、これまで面識のなかった他の本屋とのつながりが生まれた点は、ブックセンター側からの働きかけによるものだと捉えていることが分かった。本屋同士のつながりが出来た結果、直接会わずとも SNS で売り場の様子を伝え合うなど、互いに刺激を受けている事実が分かった。

---

[42] 2019 年 5 月「ヒストリーカフェ　歴史の小ネタ高座」を開催。直接的に本には関係ないイベントだがブックセンターを会場として活用している。

こうした事例から、人々にとってブックセンターが担う機能は、以下のとおりに分析できる。
第一に、共通の関心を持つ人との出会いを創出する役割である。
第二に、自身の考え方に新しい視点を生み出す役割である。
こうした点において、ブックセンターは人々にとって、交流空間として機能している。

(3) 創造空間としての側面

八戸学芸員倶楽部の事例では、F 氏がブックセンターで企画を実施した結果、ほかの場においてイベントを行う際にも同じ形態を応用できることを発見した。これと類似した事例では、E 氏がイベントの開催後、集客に課題がある点を感じ、今後再びブックセンターで企画を実施する際には、自身の活動に興味を持つ人々と連携を行う必然性を認識していた。

また、共存の森ネットワークの K 氏の事例では、ブックセンターで企画したワークショップを、実際に他の地域においてイベントを企画した際に、応用したというエピソードが得られた。ここでは、ブックセンターでの活動が団体にとって意義のあるものとして認識されていた事実が確認された。

P 氏の事例については、詩の創作活動において活用していた。聞き取り調査によって、カンヅメブースを活用する理由が、設備の居心地の良さである事実が確認された。つまり、創造行為は受容空間として居心地の良さが成立しているうえで始まっていると考えられる。

上述した三点から、人々にとって、ブックセンターが担う役割は、次のとおりに分析できる。
第一に、自身の活動に新しい方向性を見出す役割である。
第二に、新しい取り組みを生み出す役割である。
第三に、創作物そのものを生み出す役割である。
このように、ブックセンターは創造空間として機能している

以上のように、本論では、ブックセンターに集う人々の意識や活用の実態について明らかにしてきた。

ブックセンターでは、施設の開設にあたり八戸市によって位置づけられた「本と出会う新たな機会の創出」、「本を通した市民交流及びまちづくりの拠点」という目標に沿った活動が行われていることが分かった。さらにそれらに加え、市民がブックセンターの活動に触発され、直接ブックセンターとは関係のない自らの市民活動などを活性化するような事例もみられた。さらに、NPO 法人共存の森ネットワークの事例は、ブックセンターで学んだことをモデルとして、県外での活動に応用するといったものであった。こうした事例は当初想定していたブックセンターの位置づけには含まれていなかったような実践であった。

また、「居場所」の概念から整理すると、ブックセンターでは、人と出会うことで、自身の考え方に新しい視点を得たり、新しい取り組みが生まれたりしていた。

柴野京子（2008、2012）は、今後の本屋のあり方について「書物の環境論」の立場から論じて

いる。そこでは、インターネット書店とリアル書店の比較や書籍における流通出版の問題から今後の書店の問題を捉えている。しかし、そこに欠けているのは、本屋もまた図書館と同様の地域における交流施設や文化的施設となる可能性についての議論である。そこで本論ではこうした柴野のような書店研究に対し、地域における「居場所」として機能する可能性について論じてきた。つまり、柴野が指摘する本の購買という単一的な機能だけでなく、本屋が様々な機能が担えるのではないかという議論の入り口を見つけたということである。

本論では、ブックセンターを取り上げることで、地方において本屋が「居場所」となるために購買機能以外で、人々にとって必要とされる機能を示してきた。今後、それぞれの地域に存在する本屋が、各々市民が集う場となるために取り組みを考えることが求められる。

静岡文化芸術大学大学院
文化政策研究科
飯田　素乃香　IIDA Sonoka

謝辞

本論文を進めるにあたり、ご協力頂いた方々にこの場をお借りして感謝を申し上げます。八戸ブックセンターの所長の音喜多信嗣様に深く感謝を申し上げます。一昨年よりインタビュー調査を始め、本研究のために、資料の提供、地域の書店や市民団体の方々の紹介を頂くなど、お忙しいなかで多大なるご協力を賜りました。また、ご多忙のところ、インタビュー調査に対応してくださったブックセンターの嘱託書店員の熊澤直子様、森佳正様、森花子様に感謝を申し上げます。企画の詳細や利用者の方の現在の活用方法について詳しくご教授頂きました。本研究の調査にご協力頂きました、伊吉書院類家店の書店員様、木村書店の書店員様、カネイリ番町の書店員様、成田本店みなと高台店の書店員様に御礼を申し上げます。現在の八戸市内の本屋の現状について貴重なご意見を頂きました。また、日常的に施設をご活用されている八戸市の市民の方々、八戸工業高等専門学校および八戸工業大学の先生方、八戸学芸員倶楽部の皆様、認定 NPO 法人共存の森ネットワークのご担当者様、一般社団法人八戸市読書団体連合会の皆様、八戸市立図書館のご担当者様、八戸クリニック街かどミュージアムのご担当者様、青森県近代文学館の文学専門のご担当者様にこの場をお借りして感謝を申し上げます。

主指導の加藤裕治先生には、修士論文完成まで数多くのご指導を頂きました。論文の執筆経験がなかった私が、最後まで書き終えることが出来たのは、先生の熱のある叱咤激励があったためです。心より感謝を申し上げます。また、副指導の片山泰輔先生には論文の作法やマナーをご教授頂きました。加藤研究室のケイレイ様、同期の真野友理子様、家族の皆様には、研究が難航し、精神的に追い込まれた際に、何度も温かな励ましと助言を頂きました。深くお礼申し上げます。そのほか、同期の皆様、後輩の皆様には、様々な形でサポートをして頂きました。厚くお礼申し上げます。大学院に進学し、様々な人との出会いに恵まれ、多くのことを学ばせて頂きました。ご指導やご支援を賜りましたこと、心より御礼を申し上げます。

図表

表１　インタビュー調査実施一覧

取材日	所属	取材対象	場所
2019/9/14	八戸ブックセンター　所長	音喜多信嗣氏	八戸ブックセンター
2018/9/27	八戸ブックセンター　嘱託書店員	森佳正氏	
2019/9/15		森花子氏	
2018/9/16		熊澤直子氏	
2019/9/20	個人	企画に参加する市民 A 氏、B 氏、C 氏	
2019/9/17	個人	E 氏	八戸工業大学
2019/9/18		D 氏	八戸ブックセンター
2019/9/15	個人	八戸工業高等専門学校　教授 T 氏	八戸ブックセンター
2018/9/30	個人	カンヅメブースの利用者 P・Q 氏	タリーズコーヒー店・マチニワ
2019/9/19	市民団体	八戸学芸員倶楽部 F,氏 G 氏,H 氏	八戸新美術館建設推進室
2019/9/25	市民団体	読書団体 I 氏・J 氏	八戸ブックセンター
2019/8/21		認定 NPO 法人共存の森ネットワーク　代表 K 氏	メールにて取材
2019/9/25	読書団体連合会	一般社団法人八戸市読書団体連合会　会長　L 氏	八戸ブックセンター
2019/9/18	文化施設	八戸クリニック街かどミュージアム館長　M 氏	八戸クリニック街かどミュージアム
2019/10/8		青森県近代文学館文学専門 N 氏	データの提供
2019/9/15	民間書店	伊吉書院類家店　書店員 O 氏	伊吉書院類家店
2019/9/17		カネイリ番町店　書店員 P 氏	カネイリ番町店
2019/9/19		木村書店　書店員 Q 氏	木村書店
2019/9/18		成田本店みなと高台店 書店員 R 氏	成田本店みなと高台店
2019/9/20	図書館	八戸市立図書館　副館長 S 氏	八戸市立図書館

表 2　第 4 章における説明箇所一覧

所属	取材対象	第 4 章での説明箇所	活動場所
市民	企画に参加する市民 A 氏、B 氏、C 氏	4-1-1（1）	読書会ルーム
	八戸工業大学　講師 D 氏		
	E 氏		
	八戸工業高等専門学校　教授 R 氏	4-2-2（1）	まちなか
	カンヅメブースの利用者 P・Q 氏	4-1-2（1）、(2)	カンヅメブース
市民団体	八戸学芸員倶楽部 F 氏,G 氏,H 氏	4-1-1（2）	読書会ルーム
	読書団体 I 氏・J 氏		
	認定 NPO 法人共存の森ネットワーク　代表 K 氏	4-1-1（4）	
読書団体連合会	一般社団法人八戸市読書団体連合会　会長　L 氏	4-1-1（3）	
文化施設	八戸クリニック街かどミュージアム館長　M 氏	4-1-1（5）	
	青森県近代文学館文学専門　N 氏		
民間書店	伊吉書院類家店　書店員 O 氏	4-1-1（6）	
	カネイリ番町店　書店員 P 氏		
	木村書店　書店員 Q 氏		
	成田本店みなと高台店 書店員 R 氏		
図書館	八戸市立図書館　副館長 S 氏	4-2-1（2）、 4-2-2（2）	まちなか

表３　八戸ブックセンターにおける「居場所」空間一覧

所属	対象者	受容空間	交流空間	創造空間	場所
企画に参加する市民	市民Ａ	○	○	○	読書会ルーム
	市民Ｂ	○	○	○	
	市民Ｃ	○	○		
企画を実施する市民	市民Ｄ	○	○	○	
	市民Ｅ	○	○	○	
市民団体	八戸学芸員倶楽部	○	○	○	
	読書団体（八戸市内）	○	○		
一般社団法人読書団体連合会	読書団体連合会	○	○		
市民団体（八戸市外）	NPO 共存の森ネットワーク	○	○	○	
文化施設	八戸クリニック街角ミュージアム	○	○		
	青森県近代文学館	○	○		
民間書店	伊吉書院類家店	○	○		
	カネイリ番町店	○	○	○	
	木村書店	○	○		
	成田本店みなと高台店	○	○		
創作者としての市民	市民Ｐ	○		○	カンヅメブース
	市民	○		○	

所属	対象者	受容空間	交流空間	創造空間	事業
民間書店	カネイリ番町店	○	○	○	「本のまちブックフェス」
	木村書店	○	○		
図書館	八戸市立図書館			○	
	同上	○		○	「ブックトーク」
市民	市民	○	○	○	

［引用文献］

阿部真大，2011,『居場所の社会学　生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社.

一般社団法人八戸市読書団体連合会創立 50 周年記念事業実行委員会， 2018,『一般社団法人　八戸市読書団体連合会創立 50 周年記念誌　文車』.

稲泉連，2014,『復興の書店』小学館文庫，163-83.

内沼晋太郎，2013,『本の逆襲』朝日出版社， 20-21.

————，2018,『これからの本屋読本』NHK 出版，54.

音喜多信嗣，2017,「八戸ブックセンターの歩みとこれから」『人文会ニュース(128)』.

————， 2018,「政策デザイン″思考″サクゴ 八戸市を「本のまち」に -八戸ブックセンターの 1 年から-」『地方自治職員研修 / 公職研［編］51(5)』.

グラフ青森，2019,『青森の暮らし 420 号』グラフ青森，16-19.

子どもの参画情報センター編，2004,『居場所づくりと社会つながり』萌文社.

柴野京子，2008,『書棚と平台-出版流通というメディア-』弘文堂.

————，2012,『書物の環境論』弘文堂.

社団法人八戸観光コンペンション協会，2011,『南部寺子屋「はちのへ塾」八戸ふるさと検定』社団法人八戸観光コンペンション協会.

小学館，2017,『精選版日本国語大辞典』小学館.

田口幹人，2018,『もう一度本屋にようこそ』PHP 研究所.

阿比留久美，2012,「第 2 章「居場所」の批判的検討」田中治彦・荻原建次郎編， 2012,『若者の居場所と参加 -ユースワークが築く新たな社会-』，東洋館出版社，35-39.

長岡義幸，2018,『「本を売る」という仕事』潮出版社.

奈良敏行，2011，特集「本屋好き。」『BRUTUS709 号』マガジンハウス，34-35.

八戸市，2015,『八戸ブックセンター基本計画書』.

八戸ブックセンター，2018,「八戸と本をつなげるフリーペーパー　ほんのわ 2018」.

————，2017,「八戸市を「本のまち」に ： 八戸ブックセンターの整備」『市街地再開発 (565)』全国市街地再開発協会.

八戸市立図書館百年史編集委員会，1972,『八戸市図書館百年史』八戸市立図書館.

藤井理人，2018,「地域活性ビジネス事例研究 65」『JAGATinfo』公益社団法人日本印刷技術協会.

まちづくり文化スポーツ部　まちづくり文化推進室八戸ブックセンター，2018,『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 29 年度版)』まちづくり文化スポーツ部　まちづくり文化推進室八戸ブックセンター.

————,『八戸ブックセンター企画事業報告書（平成 30 年度版)』まちづくり文化スポーツ部　まちづくり文化推進室八戸ブックセンター.

間山洋八，1980,『青森県読書運動明治大正史』津軽書房.

渡辺幸倫，2019,『多文化社会の社会教育　公民館・図書館・博物館がつくる「安心の居場所」』明石書店.

［引用新聞記事］

朝日新聞 1974 年 3 月 14 日付「八戸の“先輩”は勉強好き」.

東奥日報 1984 年 6 月 7 日付「読書団体が喫茶室「らいぶらりい」開業」.

東奥日報 1999 年 6 月 5 日付「読書の楽しさ庶民に」.

［引用ホームページ］　2020 年 3 月 16 日最終閲覧

栗村千尋　「“ポップごと売る本屋さん”八戸市〈木村書店〉が描く地方書店の未来」　Local Network Magazine「colocal コロカル」　https://colocal.jp/news/118968.html

八戸工業大学　https://www.hi-tech.ac.jp/

八戸市　https://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.html

礼文町教育委員会　https://www.town.rebun.hokkaido.jp/kyoiku/detail/00000522.html

［参考文献］

秋田喜代美，2015,『本屋って何？』ミルネヴァ書房.

猪谷千香，2014,『つながる図書館-コミュニティの核をめざす試み-』ちくま新書.

尾崎秀美・宗武朝子編，1999,『日本の書店百年』青英堂.

小林善八，1978，『日本の出版文化史』青裳堂書店.

嶋　浩一郎，2013,『なぜ本屋に行くとアイディアが生まれるのか』祥伝社.

清水又吉，1991,『本は流れる -出版流通機構の成立史-』日本エディタースクール出版部.

佃由美子，2007,『日本でいちばん小さな出版社』晶文社.

永江朗，2014,『本が売れないというけれど』ポプラ新書.

永嶺重敏，2001,『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール出版部.

————，2004,『“読書国民”の誕生―明治３０年代の活字メディアと読書文化』日本エディタースクール出版部.

八戸市編集室，2005,『はちのへ市史研究　第三号』.

平田オリザ，2013,『新しい広場をつくる―市民芸術概論綱要』岩波書店.

福嶋聡，2002,『劇場としての書店』新評論.

————，2015,『図書館雑誌』10 月号，日本図書館協会.

まちの編集者，2018,『てくり』.

松本茂章，2011,『日本の文化施設を歩く　官民協働のまちづくり』水曜社.

森博嗣，2018,『読書の価値』NHK 出版.